
白く輝く帆の下で 一北の州長の奮闘記一

岡屋いまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白く輝く帆の下で ー北の州長の奮闘記ー

【Nコード】

N6494X

【作者名】

岡屋いまき

【あらすじ】

平和な日々を重ねていたクロワサント島にある日、北の大陸口ウノームスからの使者一行がやって来た。

ところがその一行は流行病に侵されており、島にも病の猛威が広がって、島民の八割近くが亡くなってしまふ。

北の州長の息子の僕は復興途中に亡くなった父の代わりとして、遠縁の大人達のお飾り州長に祭り上げられ……。

その日。(前書き)

記載。

きい様から「あとはま〜か〜せ〜た〜(笑)」と、ぽ〜んと飛んできた設定・話の流れをそのまま使用しているので、合作に近いです。

というか、合作にしよう。と声を掛けたのですが、個人名義でOK。と言われてしまいました……。

不定期更新ですが、楽しんでもらえると二人とも喜びます。

その日。

その日、僕は大きく港へ向かっていた。

「でかいんだって?」

「おう! 北の大陸ロウノームスから来たらしいぞ!」

「正式な使者一行だって聞いた!」

「おーーーーー!!!!!!」

走って向かう途中、あちこちから出て来る顔見知りや友人達と合流した。

目的はみんな一緒、話にだけは聞いていた北の大陸ロウノームスから来た大きな船を見に行くのだ。

父である州長のところへ知らせに来た港の管理者によれば、その船にはロウノームスからの正式な使者一行が乗っているらしい。

「エイブ。何が起きるか分からないから、お前は家にいなさい」と父は言ったが、そんな言いつけなんて聞けるはずがない。

見つからないように、父が港へ向かった後、少し間を置いて、僕も家を出た。

だいたい父は過保護過ぎる。

母が数年前に高齢出産に挑み、弟か妹と共に亡くなってしまった時から特に。

それから父一人子一人でやって来ている。

父の気持ちも分からないでもないが、来年11歳になれば、僕も青年の家で完全に集団生活に入るのだ。

そろそろ子離れしてほしいと僕は常々思っているが、州長館である家と青年の家が隣に建っている事を考えると道は遠そうだった。

港には既にたくさんの人が集まっていた。

その間を縫って、僕は何とかロウノームスの船が見え、なおかつギリギリ話が聞こえる位置まで進んだ。

ただし父に見つかって、後からお小言を食らいたくはなかったので、最前列には出ない。

「大きいねえ」

「おっ……」

ロウノームスの船はクロワサントの帆船とはまるで違っていた。

まず、大きさ。

そして船体の側面の両舷から、数多くの太い棒……櫂が突き出ている。

あの櫂をロウノームスでは奴隷と呼ばれている人達が漕ぎ、船が進むという事を、僕も話でだけだが知っていた。

僕が住んでいる州は、クロワサント島の最北部にあたる。

北の大陸ロウノームスに一番近く、他の州よりも大陸の情報が多く入ってくる。

僕の父がくじ運の悪さから州長となり、州長の住む村＝州都には、ロウノームスから訪れる商人がますます増えた。

ちなみに父よりもくじ運の悪い島長は、ちょうど山脈を越えた南の州の麓付近に住んでいる。

ロウノームスからの商人にすれば、直接船で乗り付けられるこの州の方が便利に違いない。

だが正式な使者ともなれば、島長の住む島都へ行つてほしい。とても派手な使者及び随行員一行に、父はそう伝えている。

それを聞いた使者は、突然に話を変えて来た。

「話はよく分かった。時に州長殿、この村に医師はいるか？」

実は船の櫂漕ぎ奴隷達の多くが病に罹っていて、今無理をすると帰りの漕ぎ手まで失い兼ねない。

島都へ行っている間、病を診て頂きたいのだが」

「医師はおりますが、一体どのような病でしょう？」

そう父が尋ねたのに、せっかちなのか使者から詳しい説明は全くもらえなかった。

「診てもらえれば分かる。我々は早速島都へ向かわねば……っ」

「案内をお願いしたいのだが」

「もちろん礼はきちんとする」

「行ける所まで船で進み、途中からは馬車で進む事になりますが、宜しいですか？」

「かまわん。宜しく願います」

正式な使者に行く先々で騒動を起こされては適わないし、万が一遭難なんて事になりでもしたら目も当てられない。

父は慌てて、帆船を準備させ、島都までの案内人を頼んだ。

休憩も一泊もなしに使者は島都へ出発したが、使者達は威張っている感じがするし、接待せずに済んで良かったと思う。

ノウロームスの使者と随行員を見送った後、父は入れ違っようやっつて来た医師達と一緒に、船の中へ入っつていった。

が、あっという間に出て来て、口々に叫び出した。

「みんな！ 村中の医者を呼んできてくれッ！」

「それから何か消化に良さそうな食い物ッッ」

「150人分頼むッ！ 症状が重い奴はどこかに寝かせないと……ッ」

「ここから逃げ出さないようにだろうが、3人一組で足を鎖で繋がれて、明らかに全員栄養失調だ。

これじゃあ治るものも治らん」

父は船から降りると、州長館へ向かった。

近くの村に医師の派遣を依頼する手紙を書くのだろう。

最後まで父に見咎められずに済んだと思う間もなく、僕も心当たりの方向へ走り出した。

ノウロームスの權漕ぎ奴隷達が何の病なのか、どの医者も答えを出せなかった。

対処療法で船から清潔な屋内へ身柄を移して隔離し、熱さましや鎮痛剤を飲ませた。

最初は栄養失調等の長い間の奴隷生活がたたった病だと思われていたが、しばらく経つとそれだけではないのが分かった。

ロウノームスからやって来た病は感染力が強く、しかも致死率が異常に高かったのだ。

そうと分かった時には手遅れだった。

病は僕の住む北の州に留まらず、最終的にクrowサント島全てに広がっていった。

「州長！ 家族がやられた！ 貯蔵してある薬草を分けてくれ……
っ！」

毎日こんな風に村人達が州長である父を訪れた。

ばたばた人が倒れ、医師もいなくなり、感染は体力のない老人や子供から次々と命を奪っていく。

もうすぐ冬になるというのに、貯蔵していた薬草は底を尽いた。

感染を防ぐ為、他州は州境を閉ざしており、無理に越境する者が出た事から、関係も悪化し、助けは期待出来ない。

他の州もきつと助けるどころではなく、それぞれ対応に追われている事だろう。

「……薬草はもうない。とにかく体を冷やして熱を下げてください」

そう言って、父は村人達を追い帰した。

その頃、僕もまた病に感染していたのだ。

「……お父さん、これ。さっき、もうない……って」
「……。……いいから、飲め。飲んで元気になるんだ、エイブ」

僕の為に父が嘘をついてまで手元に残した最後の薬草湯を、僕は
飲んだ……。

その日。(後書き)

くじ引き

クロワサント島では1年に1回、コメ(もどき。以降コメで統一)の収穫祭の時にくじ引きが行われている。

くじ引きは基本的に村単位で、全ての村人が役割に付くようになっている。

村長・相談役などから、田園への水路整備係まで、20歳以上の全ての人がくじを引き、土地も同様に割り振られる。

くじ引きは、個人的な交換なら可能だ。

州長は10年に一度、その年村長になっている全員でくじを引く。

村長は1年で交代出来るが、州長は10年間も交代出来ない。

州長を引いてしまった人は、村長も10年間兼任で勤めなくてはならない。

そして島の代表「島長も、州長のくじ引きの5年後、現島長の州を抜かした州長9人でくじを引き、大当たりを引いた州長が島長となる。

つまり10年間、村長兼・州長兼・島長であり、島長のくじを引いたくじ引きに非常に弱い村長の村は、10年間島都と呼ばれる。

州長になった。

父が死んだ。

過労死だった。

息子を助ける為とはいえ嘘をつき、最後の薬草を隠匿した、という後ろめたさの為か、父はその埋め合わせをする如く、身を削って州の為に働いた。

「お父さん、まだ起きてるの？」

「もう少ししたら寝るさ。先に寝ていなさい、エイブ」

「お父さん、ご飯は？」

「さっき済んだよ。エイブは成長期なんだから、ゆっくり食べるんだぞ」

「お父さん、少しは休まないと……」

「ああ、そうだな。これが終わったら……」

僕には父が罪悪感から働き詰めに行っているのは分かっていた。

だが、その明らかに我が身を顧みない州長振りを心配せずにはいられなかった。

それなのに何度同じ様な言葉を繰り返しても、父は州の為に働き続けるのを止めようとはしなかった。

父が亡くなって数日も経たないうちに、遠縁の者が僕に御託を並

べ出した。

「亡き州長の遺志を継げるのは一緒に付いて回っていた君しかないよ、エイブ君」

「州都以外から集まって来ている人達にも一番顔を覚えられているでしょうし、エイブ君が州長を引き継ぐべきだわ」

一体何を言っているんだ、この人達は……。

「僕はまだ十五歳の子供です。州長など僕には無理です」

とてもではないが、僕は父の様に動く事など出来はしない。

州都再建に向けて動いている皆だって、15歳の子供にアレコレ言われたくないだろうし、まとめ役などどうしたって無理だ。

「ちょうどいい機会です。新たな州長はくじ引きで決めませんか？」

だからクロワサント島のこれまでの制度通りに戻そうと、くじ引きを持ち出したのだが、遠縁の者は意見を引かず、更に言い募ってくる。

「今はまだとてもくじ引きなど出来る状態ではないさ」

「くじ引きをして働く場所が変わってしまったら、それこそみんな混乱して復興が遅くなるじゃないの」

しかしきつと遠縁の者達の心の内は違うのだ。

くじ引きとなれば、遠縁の者達が面倒を見なければ、15歳の僕は孤児として、青年の家に入る事になる。

そして自分達と関係ない者が州長になれば、遠縁の者達も当然州

長館から出なければならぬ。

それは復興のおこぼれに預かれなくなるという事を意味している。州長館に留まる為に、僕を州長の座に据えたいのだろう。

だというのに、一見その意見が道理に適っていたのが問題だった。

遠縁の者達のそんな内心を知らない、復興仕事のまとめ役として動いている親方達を含む大人達が、その意見に賛成してしまったのだ。

働き過ぎる父が心配で側にいただけなのに、それが返って仇になるなんて僕は思いもしなかった。

「僕はくじ引き制度を復活させたいんだけど、どんな風に言えば大人達を説得出来ると思う？」

堪り兼ねて僕は生き残っていた同年齢の幼馴染達に相談した。

てつきり州長を固辞すべく一緒になって考えてくれると思っていただけだ。

「くじ引きなんて無理だろ」

「無理よ」

「無理無理」

と、一刀両断されてしまった。

その上、青年の家に住む皆は、幼馴染を皮切りとして、僕の思惑とは反対にごぞつて州長になれと言い募ってきた。

「俺はエイブ以上に青年の家を気に掛けてくれる大人はいないと思

う」

「エイブが出て行っても、遠縁の奴等は理由を付けて、州長館から出て行かないかも知れないぞ」

「うん。エイブは辛いだろうけど、州長館に留まってほしいなっ」

「小さい子の面倒を見るのはエイブじゃなくても出来るけど、青年の家を少しでも守れるのはエイブだけだよな」

未だに16歳になると大人と一緒に復興仕事に駆り出されるので、15歳は青年の家にいる子供達の中で一番年上だった。

幼馴染達も、年下の子達を守ろうと自然と責任感も湧いているのだろう。

そして最後には、州の最高齢者である、北の賢者おばあちゃんの鶴の一声に止めを刺された。

「エイブ。気持ちは分かるけれど、今はくじ引きなんてしている時期じゃあないよ。お前が州長におなり」

「おばあちゃんまで……」

僕はがつくりと肩を落とした。

おばあちゃんは賢者として名高く、流行病が拡がる前から世話役として青年の家に住んでいる。

流行病さえも乗り越えて、足腰目耳と弱ってはいるが、杖さえ持てば歩ける。

青年の家の女の子達が、おばあちゃんの世話役を交代で受け持っていた。

そんなおばあちゃんの勧めもあり、気は進まないが僕は推される

ままに州長になった。

ところが、何かあったら父の指示に従っていれば大丈夫だという北の州の大人達の意識が、僕にとって大きな問題となってきた。

少しずつだが父の代わりに、遠縁であり同じ州長館に住み、父の補佐していた者達の指示に従えば、北の州の復興は進むという意見が増え、最終的に復興の全権を遠縁の者達が握る事になったのである。

生前の父は遠縁の者達に、青年の家の孤児達の世話も頼んでいた。

しかし、ある時。

僕は青年の家の子供が州長館で食器洗いをしているのを見つけてしまった。

更に、遠縁の者の部屋から掃除道具を持って出てきたりするのに
出くわす事が多くなった。

気が付くたびに僕が代わろうとすると、「怒られる」「大丈夫だから」と断られ、遠縁の者に対し怯えてもいる様だ。

「あの子達はあなた方の召使いじゃないんです」
そう僕が言っても。

「大袈裟だな、エイブ君は」
「手が空いていそうだから、ちょっと頼んだだけよ」
そんな風に遠縁の者達はまるで取り合おうとしない。

その上、青年の家に回す分の物資や食料を、遠縁の者は着服しているらしい。

しかもそれは年を追うごとに酷くなっていた。

本来なら11歳から19歳の青年達が共同生活する青年の家は、僕の憧れの存在だ。

今はそんな憧れや羨ましい場所には程遠い。

2・3歳から15歳まで、身寄りのない子供が住み、州長館付属の召使いとして援助を受ける側に回っているのだ。

くじ引き制度復活がまだ早いというなら、せめて青年の家を本来の状態に戻したい。

16歳になってしまうと、幼馴染達は大人扱いとなり、青年の家から出なくてはならなくなる。

そうになると、今より接点を持ち辛くなるに違いなかった。

だからあと1年で本来の状態への方向性が付けられる様に……。

幸いというべきか、お飾り州長として、考える時間だけなら僕にはたくさんあった。

でも、どこから手を付けていけばいいのだろうかと、おばあちゃんに相談を持ち掛ける為に僕は青年の家へ向かった。

「そつだねえ……」

おばあちゃんが僕の考えを吟味するように黙り込むと、それを側で聞いていたその日のお世話を受け持っていた幼馴染が力説して来

る。

「まずご飯のおかずをもう一品希望！ 最低生活脱出！！」

青年の家に回るはずの食糧を僕も遠縁の者達と一緒に口にしているはずで、思わず謝罪が口をつきそうになった。

でも僕からの謝罪など、幼馴染が望んでいるわけではない。

謝りさえすれば僕はその分気持ちになるだろうが、青年の家の現状は全く変わらないのだ。

建設的な事を考えようと、耐える。

まず飢えたままでは仕方がない、という事だ。

州の復興と、青年の家を本来の状態に戻すのでは規模が違うが、父も食糧確保から動いていた事を僕は思い出す。

「確か、前は田んぼや畑を青年の家で独自に持っていたよなあ？」

「うん。今はその場所の収穫物も州都の物になっちゃってるけど……」

「じゃあ駄目か……」

元は青年の家の田畑だったのだから返してほしいと頼んでも、遠縁の者達が頷いてくれるはずがない。

「山で山菜採りは？ 薬草も摘める」

さすがに父の様に、雪山で狩りなど僕には真似出来ないが……。

「それならたまに思うんだけど、どれが食べられるのかがよく分かんなくて。」

それに小さい子の面倒も見ながらだから、あんまり奥までは行けないだろうし」

黙って、幼馴染と僕とのやり取りを聞いていたおばあちゃんが口を開く。

「エイブがお探し」

「え、探すって何をですか、おばあちゃん？」

「青年の家も州長館にも植物事典があるじゃろうから、それを探し出すんじゃよ。」

「どれが食べられるか、それとも駄目なのか、覚えるまでそれを持つて採りに行くのさ」

「そっか、なるほど」

「それに山や野だけじゃないんだよ。」

「州都はすぐ近くに海もあるんだからね、砂浜で海藻や貝が採れる。波が高くない日を選んで行けば、小さいお子等と一緒にでも大丈夫じゃろう」

「海藻や貝の事典も僕が探すんですね」

「そうじゃ。まずはそこからさ、頑張るんだよ、エイブ」
そう言っつて、おばあちゃんはにっこりと笑った。

ただお飾りになっつているだけではなく、お前にもちゃんと出来る事があるんだよ、と僕は言われた様な気がした。

「はい。じゃあ早速探してみます！」

「私もこの事をみんなに伝えとくから」

「うん、頼んだ！」

僕は駆け出した。

州長になった。(後書き)

青年の家

クワサント島の島人は、生まれてから最初の10年は親元で過ごす。

6歳から10歳までは通いで、『青年の家』で日中過ごす。

11歳から19歳までは、青年の家での集団生活。

青年の家での生活の間に、どことなく引いても大丈夫なように、基本的な職業訓練が行われるのだ。

青年の家は、基本的に村長(州長)の家の横に建てられている。間に敷居はない。

日常生活(食事洗濯農作業田植えなど)を、子供達それぞれで世話しあう。

その子供達の先生役&相談役として、年配になり田植え労働がきつくなった老人達があたり、仕事の仕方をビシビシ鍛えた。

中には100歳を超える長老もいて、知恵者として大事にされている。

相談役のくじは老人達に回すのが、くじにおける暗黙の約束になっていた。

始動する。

僕がお飾り州長になった頃から、何とか病の流行は下火になり、州も落ち着きを取り戻し始めていた。

州都に集まって来ている人々が、北の州全体の生き残りならば、9割の住民が亡くなっている事になる。

親や身寄りがいる子供達と、青年の家にいる子供達は、今はそれぞれ住む場所は違うけれど、元は近所に住んでいたりして仲良しだ。

「あ！ バナちゃん、みんなでどこ行くの〜っ？」

「これから、海へおかずを採りに行くんだよ〜！」

「海に、おかず??？」

「海藻とか〜、貝とか〜、なんだって！ 一緒に行く？」

「うんっ、行く行く！」

「でもね、大人には内緒だよっ！ 子供だけの秘密なのっ！」

「分かった、秘密だねっっ」

そんな風にして秘密の仲間の一員は増えていく。

一緒には出掛けられないが、僕も後から覗きに行つて、砂浜でキヤーキヤー騒いでいるのが青年の家の子供達だけではない事に気付いて、嬉しく思う。

「わあ！ エイブお兄ちゃんも来た〜！」

「頑張ってるね〜、バナ！」

「うんっ！ 病気は海から来たけど、海にはちつとも関係なかったんだよ。だってこんなに気持ちいいもんっ」

ロウノームスの船はこの病気はおかしいと気付いた時点で、父の指示により燃やしてしまった。

もし海の生き物にも流行病がうつるなら、一面死骸だらけで腐った臭いがするに違いない。

バナは僕よりも8歳年下、青年の家の女の子だ。

年長者に引っ付いている年齢でもないが、年下に手取り足取り教えられるほど面倒見が良くなっている歳でもない。

青年の家の中での着替えや食事中ならともかく、今は外に出ているのだ。

ご飯がかかっているというより、同年代の子供と遊んでいたのだろう。

僕は面倒を見なくてはならない小さい子供を連れた幼馴染を見つけた。

「調子どうっ？」

「楽しいよ〜。本と一つ一つ照らし合わせないといけないのは大変だけど。」

それにいっぱい採れそうだから、一日では食べきれないかも。

赤ちゃん貝は採らないで、海に逃がしてねって言うてはいるけど

……」

「そっか〜。配るわけにもいかないしなあ」

「大人には内緒なんだよ！ エイブお兄ちゃん！」

話を聞いていたバナに諭され、笑った後すぐ大真面目に頷いた。

「そつだよな、うん。内緒内緒。」

……手伝えなくて悪いけど、早速おばあちゃんに相談してみる。
潮が満ちる時間には気を付けて」

「は〜い。頑張つてね〜、エイブ州長様〜っ」

黄色い声援を向けてくれたのは嬉しいが、州長にしかも様付けまでされて、僕はガツクリと肩を落とす。

「……頑張りたくない」

「「駄目！」」

「……はい」

何が出来る訳ではないが復興の進み具合を見ようと、色々な場所に寄ってから青年の家に僕は帰った。

おばあちゃんに海で幼馴染が言っていた保存方法について尋ねると。

「干すか、佃煮だねえ。一度茹でてから、塩漬けでもいいよ。そうすると傷み難くなるのさ。」

……そつかそつか、海は健やかだったんだね、有り難や」

まず保護者と一緒に住む子達を家まで送り届けてから、青年の家に帰って来たらしい皆を僕は州長館の窓の内からこっそり見ていた。

その表情は明るい。

砂浜で拾ったり、食べ終わった貝殻は綺麗に洗い、腕輪や首飾りにしたり、重ねてくっ付けてちよっとした置き物にしたり、食べるだけでなく皆で楽しんだ。

僕が後から聞いた話によると、潮が満ちてくるのを始めに気が付いたのはバナだったらしい。

始めに言い出したバナに、

「もう少し大丈夫じゃない？」

と答えているうちに、あれよあれよという間に波が押し寄せて来たのだそう。

「良く分かったなあ、バナ。偉いぞ」

「えへへ」

照れたバナの頭を僕は撫でた。

日々本を片手に子供達が食材探しに海や里山へと出掛けるのを僕は見送る。

始めは大人には秘密の行動だったのだが、青年の家の子供達以外にも一緒に行っていたので……まあ、少しずつバレた。

「今日はどこに行ったの？」

「秘密！」

「あら、そうなの？」

「ここまで良いとして、

「……お母さん、食べられる貝と食べられない貝があるって、知ってた？」

新たに仕入れた知識を、子供は大人に披露してしまうものだからだ。

保護者達にしても、子供達が団体行動してしてくれた方が安心だし、ちゃんと帰りは家まで送り届けてくれるのだからと、黙認した。

そのうちに手の空いている大人も一緒に行ったり、自分のところの子供も団体行動に混ぜてほしいと頼んで来たりし始めた。

その上、これはOK、これは駄目、こんな料理が美味しいよ等々、知識を伝えるようになり、食糧調達に向かう子供達の行動範囲はますます広がっていった。

大人達の裏からの協力を支えられながら、青年の家の子供達が食糧調達をするようになってから、しばらく後。

遠縁の者が探るような目をして、僕に聞いて来た。

「隣の孤児達と何かやってるんじゃないか、エイブ君？」

「隣の皆は、最近、海や山に遊びに行ってるみたいですよ」

「エイブ君は行ってないのかい？」

「はい。僕はほとんど付き合えてません。そのうち飽きるんじゃないですか？」

州長館に取られている分の食い扶持を自分達で稼ごうとしているんだ！ と言いたいが、今邪魔をされるのは困る。

僕は苦しい言い訳をして誤魔化した。

遠縁の者達は召使いがいなくなったら困るとでも思っているに違いない。

でも僕も自分が100%善意から、青年の家を元の状態に戻そうとしている訳じゃない。

最後の薬草を私物化した罪悪感から、父が州の復興に文字通り命を懸けたように、その薬草を飲んだ僕は、青年の家を元の状態に戻せば贖罪になると、心のどこかで思っている。

もちろん、くじ引き再開もしかり……。

もし薬草の件がなければ、僕だって遠縁の者達のように、手に入れた権力を手放すまいと、青年の家の幼馴染達の事など放っておいたかも知れなかった。

とにかく遠縁の者達に疑われ始めている事を伝えておこうと、僕は青年の家へ向かった。

すると待つてましたとばかりに、幼馴染達に引っ捕らえられる。

「エイブ！ 小舟の直し方、知ってる？」

「たぶん州から逃げ出す時に使って、射掛けられた小舟だと思うんだけど、浜に打ち上げられてるのよ」

「直すのが分からなかったら、小舟を作る方法でもいいぞ」

「え、ちょっと待って……」

戸惑う僕に、幼馴染は更に口々に言い出した。

「船があれば、魚釣りに行けるだろ」

「貝や海藻を食べ続けても何ともないんだもん。海の魚も食べたい」

「釣りつて、どうやるんだっけ？」

「糸の先に餌を付けて、んで〜？ あと網で獲ったりもしなかったっけ？」

「ちょ、ちよつと……」

せ、せめてメモしたい……。

しかし僕の制止など、幼馴染は聞いちゃいなかった。ひたすら自分達の言いたい事だけを述べて来る。

「余ったら、魚も干せるらしいよ」

「他に魚の保存方法ってあるのかな？」

「調べといて！ エイブ！！」

様々な言葉に押し潰されそうになっている僕を助けられるのは、おばあちゃんしかいなかった。

「こらこら、お前達。エイブが困ってるじゃあないか。」

さすがに私にも分からないんだよ。助けになれなくてすまないねえ、エイブ」

「そんな事ないです。十分助かりました、おばあちゃん」

幼馴染達からの猛攻撃を止めてもらえただけで、とは口に出すと後から怖いので言わなかったが。

「ええつと……。まずは船から？」

「そうだよ。調べ物が色々あるんだから、今度はちゃんんと文字が読める子に手伝ってもらうんだよ、エイブ。」

「何もかも全部自分一人で調べなくっちゃって、しよい込む必要はないからね」

「はい、おばあちゃん」

「おばあちゃんに言われて、僕は随分気が楽になったのを感じる。」

「僕にとってのおばあちゃんのような存在が、父にはいたのだろうか？」

「もしいれば、父は死にまではしなかったのではないか……。」

「ところで、エイブ。しばらくの食材も確保出来たし、みんな外で集団行動するのにも慣れてきたから、隣村まで出掛けて、田んぼと畑を始めようと思ってるの」

「隣村？」

「そういえば海や里山に行く前、流行病前に青年の家が持っていた田畑の事が話題に出たっけと、僕は思い出した。」

「そ、弁当持参でな」

「州の生き残りは州都に集まって来てて、周りの村は放置されて寂れてるだけのはずだし」

「農具とかもそのままだといいんだけど」

「あとは苗種だよな」

「だよな」

僕なら何とかしてくれるだろうという、幼馴染達の期待の籠った視線を無視したい。

「ごらごら、お前達っ」

「だって、おばあちゃん……」

「だって、じゃあないよ」

「はぁ〜い」

「……おばあちゃん、ありがとうっ」
僕は内心涙した。

始動する。(後書き)

クロワサント島

クロワサント島は太い三日月の船が転覆したような形をしている。

島の外周は砂浜では続いてはおらず、所々は切り立った断崖が続いている為、歩いて巡ると半年近くは掛かるのではないかと言われていた。

島の中央には東西に、雲が垂れ込めると頂上が隠れてしまつくり高い山脈の峰々がいつくも連なり伸びている。

そんな高い山には雪が降る事もたまにあるが、基本クロワサント島の気候は高温多湿で、山脈の南側は特に雨が多かった。

山脈はクロワサント島の南北を隔てる州境となっていた。

更にその南北も、山脈を源流とする川でそれぞれ5個ずつの州に分かれ、クロワサント島は計10の州で成り立っている。

州は、一番左から西南の州、西北の州、南西の州、北西の州、南の州、北の州、南東の州、北東の州、東南の州、東北の州と呼ばれている。

初めての舟。

「みんな、今日は本を探す手伝いをしてもらえないか？」

次の日、たまたま雨で外に出れなくて、青年の家で暇を持て余していた年下の子達に僕は声を掛けた。

「舟の本を見つけたら、僕のところを持ってきて欲しいんだ」

「昨日見つけた小舟の修理の本？」

「そうだよ」

さすが青年の家。

情報伝達早いなあ。

「どんな本でもいいから、舟が書いてあったら持ってきて」

簡単な文字しか読めない小さな子供達にも声を掛けた。

みんな一斉に本棚に殺到し、次から次へと持ってくる。

僕はどんどん本に目を通していった。

一通り目を通して思ったのは、舟に関して全くの初心者である為、僕らが必要としている舟の修繕や造船に関して書いてある専門書は、ただ字面をなぞっただけでは今一つピンと来ないというものだった。

所々に使われている専門用語も意味不明である。

その内容に戸惑ったのは幼馴染達も同様だった。

「うがっつ。分からんっつ」

「なんで舟に油があるの？」

「う~~~~~ん」

みんなで頭を抱えていると、

「さすがに本だけじゃ無理かねえ」

「おばあちゃん」

おばあちゃんとも話し合いの上、やはり一度舟に詳しい人に相談に乗ってもらおうという事になった。

僕らの行動を陰ながら支えてくれるお母さん達に、話を持ち掛け、そこから更に秘密を共有してくれそうで、舟に詳しい人を紹介してもらった。

偶然にも、バナの幼馴染のお母さんのお父さんだった。

「久しぶりだ、バナ。元気だったか？」

「……おじさん誰？」

「お前の父ちゃんの仕事仲間さ。まあ前にあったのは、お前が生まれた時の時だったからな。覚えてるわけないよなあ」

「……お父ちゃん？」

「お前の母ちゃんも知ってるぞ。お前は二人によく似ているよ。懐かしそうにバナの頭を撫でている。」

話のきっかけに出来ればと思ってバナを連れてきたけれど、娘さんから聞いていた通り、バナの両親は親方に随分と気に入られていたらしい。

「……お疲れのところ、すみません」

もちろん遠縁の者達がない時間を見計らうのは忘れない。

「子供達の悪巧みの相談に乗ってやってくれって言われて何かと思えば、お前かぁ、エイブ」

早速、相談に訪れた家で、初っ端僕は笑われた。

「そんな、人聞きが悪いです。他言無用でちょっと……じゃなくて、色々と質問したい事があるだけで」

「それを悪巧みしてるっていうのさ」

変な風の話が伝わってしまっているのか？

いや、親方のこの表情だと、ただ単にからかわれているか、面白がられているのだろう。

「それで、何を教えてほしいって？」

「ここが分からないんですけど」

僕は予め持参した本を見せる。

「ああ、これはな……」

基本的に僕達子供に仕事を教えてくれる大人は、人柄がイイ人
〓復興仕事をする者達をまとめる親方達や、その手伝いをしている
人達が多かった。

だから僕の名前も知っていたのだ。

今回のお願い相手が親方で、顔を何となく知っている程度の面識
しかない大人相手じゃない事に、僕は大いにホッとしていた。

「それにしても、どうした、エイブ？ 今北の州に舟などないだろ

うが。なぜ舟について聞いてくる？」

「友達が、難破している舟を見つけたんです。直して使えば、魚釣りに沖に出れるかと」

「海に出るだと?!」

「ええ」

「馬鹿な！ 病は海から来たんだぞ！」

娘さん以外のすべての家族を流行病で亡くした親方の気持ちは分かる。

北の州のほとんどの者が、同じやるせない気持ちを海に対して抱えているだろう。

だが、ここで止めるわけにはいかない。

この村は海と共に生きてきた。

海こそ僕らの復興のカギなのだ。

「親方、海は変わりありません。北の州の病が終焉したように、海の病も終焉したでしょう。」

変わらず僕たちに豊かな恵みをもたらしてくれています」

「だが。またもし何かあったら……」

「大丈夫ですよ。前は病に負けましたが、それは病について何も知らなかったからです。」

今は病がどう進むかどんな症状が出るか分かっています。早期に対処を行えます」

「うむむ」

「どうぞやら話を聞いてもらえそつだ。」

僕は親方に、青年の家が目指す『ご飯のおかずをもう一品希望！』の話を聞いてもらった。

さすがの親方も、青年の家の実情は気付いてなかったらしい。

整理されず、つかえる僕の話、真剣な顔をして聞き続けた。くれた。

今日は朝から舟の修繕である。

最初は青年の家の子供達と親方による口頭のやり取りだったのだが、そのうちに村全体が参加する、雨の日の恒例相談会に広がった。

最初は難破船集めだった。

まずは使えそうな木板に付いた貝殻を削り落とすところから始まり、木板の損傷部分の交換・修繕・そして組み直し。

そして帆の作成方法。

それらを紐ロープで繋ぐ。

木板の継ぎ目には、繊維を練り込んだ防水油を詰め込んで隙間を埋める。

浸水防止としても、油は全体に塗っていく。

「この結び方は舟以外でも使えるからな。この際、しっかり覚えてとくんだぞ！」

「はい！」

「指ぬきを忘れるな、自分の手を縫うなよ！」

「わわわ……っ」

「ずっと水が浸かっている部分はどうしても脆くなりやすいが、そのつど修繕していけば何十年も乗れるからな！」

「おお〜ッ！」

操船方法に、網の修繕方法や、竿の手入れ、餌の付け方も一から教わり……。

それらの教えを新たに書き残し、纏める役は僕に押し付けられた。なぜなら。

「もっとキレイに書きなさいよ、読めないでしょっ！」

「誰これ書いたの、汚いわね〜」

と、女の子達から散々に言われ。

「あいつら、やいやいウルセエんだよ」

「だから頼むな、エイブ」

「な……っ。僕だって文句言われたくないんだけど……」

やる時はやるし、しっかり口もアイデアも挟む幼馴染達（男）が、文句を言う幼馴染達（女）を恐れて、字を書く作業を僕に押し付けたのだ。

書き写しが間違いないか、書いてはみたものの、やっぱりここが

分からない等々。

何度も親方の所に聞きにいった。

だが、『ご飯のおかずをもう一品希望！』が州都全体にひっそり浸透したのに、まとめ役は僕のまま。

その内、書類作成は僕に押し付け、州の事務仕事まで僕担当だと周知定着してしまった。

押し付けられるたびに僕は、

「やって下さいよ〜」

と言うのだが、誰もが、

「任せたぞ〜。よっ、纏め上手！（笑）」

と、取り合ってくれない。

仕方なく仲間に、

「お前らズルイ〜。僕も書類作成以外で動き回りたい〜」

と愚痴を零しつつ、それらの仕事をきっちりこなしていった。

州の事務仕事で唯一嬉しい誤算だったのは、書類作成という最終的な〆を僕が行っているので、遠縁の者達がただの書類預かり係になり、実権がほぼなくなった事だ。

もう復興のおこぼれにはあずかれない流れになっていると、ちゃんと気付いてくれますか……叔父さん叔母さん……。

初めての舟。(後書き)

ある日のエイブ

朝、起床。

昨日終わらせた書類を見直し。

遠縁の者達と朝食を取る。

収集に出かける青年の家の子達と一緒に村まで出かけ、書類を届ける。

州長館に戻って、出来ていない書類と今日頼まれた書類の作成。

「ぐう……。分かん。前はどつなつてたんだっけ？」

ゴソゴソゴソゴソ……。

「……読めない」

「おゝい、エイブ、これ頼む〜」

「親方がいいところに〜！ コレ教えてほしいんですけど〜！」

「おう。これこれこついう訳だな。こつなっている
「なるほど〜」

「教え賃に、こいつも頼む〜」

また増えた！ しかも……！！

「ぐがあ！ 読めないじゃないですかあ！」

「おう。だから清書をな。こいつは道具と人を借り出す書類だ」
「じゃあ、とうとう?」

「おう! 始めるぞ! 青年の家の奴らに明日の朝、港に来るよう伝えてくれ」

「わかりましたっ!」

打って変わって、自然と声が弾む。

「頼んだぞ」

去っていきこうとする背中を呼び止めて、もちろんお願い!

「僕も乗りたいです!」

「手持ちの書類が全部終わってたらなっ」

「親方、ヒドイっ!」

終わる訳ないじゃないですかっ! 次々もってくるのは誰ですかあ!!

ちょっと落ち込みながら、おばあちゃんとお昼ご飯。

「どうかしたのかい?」

「明日、始動するそうです」

「そうかい。じゃあ今日中に潮の流れや海底の様子を書いてある地図を探さねばね」

「……ワカリマシタ」

明日、舟に乗れないのは確定です……。

午前中頑張つて、書類をだいぶ片づけたのになぁ……。

午後いっぱいかけても見つからない地図に、涙目になった僕。

「おゝい。エイブが捜してるのはこれ〜?」

幼馴染が薄い大判本を持ってきた。

中を見て、

「こ〜れ〜だ〜〜〜っ!」

叫んでしまったっ!

「借りーっなっ!」

「おっっ、貸しとくっ!」

明日親方に渡さねばっ! と意気込んでいた僕は、ニヤニヤと幼馴染が眺めて来ているのに気付かなかった……。

抱負。

食糧確保の足掛かりを作った状態で、幼馴染達は次々と16歳になり、青年の家を出て行った。

保護者がいる幼馴染達も同様に、大人達の仕事に交じっていく。

予想していた通り、仕事を始めた事で、どうしても接点が少なくなつたが、幼馴染達は一緒に働いている大人達の現状やこの先どうしていききたいかの意見を集めてくれた。

集めるだけではなく、青年の家やくじ引きの復活についても、尋ねてくれている。

「あれ？ いつもお前等、くじ引き復活は無理って言ってたのに？」

どういふ風の吹き回しかなど、僕が問い掛けるれば。

「エイブがあんまり何回もくじ引きくじ引きて言うからさ」

「そうそう。青年の家の食糧確保が上手くいったし、くじ引きも…
…と思うわけ」

これまで全然話を聞いちゃくれなかったが、どうやら僕の粘り勝ちらしい。

「流行病の後にも赤ちゃんは生まれてるもん。このまま病が下火続きなら、そのうち人が増えて、州都だけじゃ皆を賄えなくなる」

「そしたら隣の村とかに自然と移住する事になるんだらうけど、その移動先の土地とかが早いもん勝ちじゃ、不公平になるに決まっ

てるよ」

「そう考えると、やっぱりそうなる前に……くじ引き？」
「かなあ……」

「だろ！ くじ引きだよ！」
僕はここぞとばかりにしっかり頷き、力説した。

集まって来た北の州の人々が州都に収まっているうちに、くじ引き復活を成すべく、僕は幼馴染達とすっかり顔見知りになった大人達から説得していく事にした。

書類を頼みに来た時に、
「親方。ちよつと相談が……」
そう話を持ち出す。

「おう。なんだ？」
「新しい船を作りたいんですけど、作れそうですか？」
「新しい船かあ……」

「ええ。今幼馴染と話してたんですが、村のみんな結構海に出るようになったそうじゃないですか」
「ああ。そうだなあ」

「そうすると、今ある船じゃ足りなくなりませんか？」
親方は悩んでいるようだが、畳み掛ける。

「うん。今でさえ不足気味だからなあ」
「でしよう？ だからこの際、新しい船を作っちゃうのはどうかな

と

すると親方は少し考え、そして賛成してくれた。
「まあ、みんな舟の修理はお手の物になったしな。新たな船を作るのも、皆のやる気が起きそうだ」

「ですよね！ 計画お願いしてもいいですか？」

「おう！ ただし書類は任せたぞ！」

しかし、それを聞いて僕はガツクリだ。

「え〜。たまには自分で書いて下さいよ〜」

「わしの字は汚い。お前も読めんって言うてただらうが」

「そうなんですけど〜。たまには僕も皆と一緒に働きたいです」とも言ってみるが、親方には通用しない。

「しよっちゅう混じってるだろ？」

「そりゃあ、書類はっかり見てるのは飽きますもん」

「お前の字が一番きれいなんだ。任せるよ」

「ちえ〜」

そのまま親方は州長室を出ようとするが、実はまだ本題がある。

「あ、親方！」

「うん？ どうした？」

「それで、新しい船なんですけど、管理をどうしようか悩んでるんで

す

「うん？　今まで通りわしがやるぞ？」

「ええ。何も言わずに甘えちゃおうかなと思ったんです。実は」

「おい。言ってくれるなあ」

親方は呆れている。

僕も親方に任せてしまうのが、一番楽だろうとは思っけれど、それで進んではいけないのだ。

「でも、どんどん船が増えて来たら、親方一人に任せるのは甘えすぎだと思っんです」

「だなあ」

「それで、何かいい手はないかなと思っただんですけど、何も思いつかないんですね」

僕は悩むふりをして、親方に尋ねる。

「昔はどうやってたんですか？」

「昔かあ……」

おっしやあ。

親方に、くじ引きしていた当時を考えさせる事に成功！

あんまりくじ引きを押しても、子供の戯言に取られちゃうし、今回はこれでいいよな。

「あ、親方。もう一つお願いが」

「……おう？」

次は何を言い出す気だと警戒されているらしく、親方の返事にはほんの少し間があった。

申し訳ないと思いつつも、僕個人にとっては大事な事なので続ける。

「新しい舟の木材の切り出しに行く前に、叔父達に声を掛けてもらえませんか？」

「うん？」

「確か叔父達の誰かが山の村の出身で、僕らじゃ分からない木材について教えてもらえるかもしれないんです」

「ああ。確かになあ」

「よろしくお願いします」

「おう。長い目で見てやらあ」

親方に叔父達の面倒を押し付けしてるのがバレてる……。

でもくじ引きに戻すなら、州長館のお荷物状態の叔父達にも動いてもらわないとマズイ。

大仕事を請け負ってくれる親方を最敬礼で送りだし、僕は甘える事にした。

さらに、色んな人に声を掛けていくと、どうやらおばあちゃんもこっそり人を呼び寄せては諭してくれているらしく、

「その話、おばあちゃんにも言われてなあ。考えてみたんだが……」
という事が時々あった。

話が早いのは助かるし、仕事を始めて数年の若人達に言い出されるよりは、北の賢者であるおばあちゃんからの提案の方が受け入れやすいし説得力もあるに違いない。

少しずつ前に進んでいる実感を得ながら、頑張ろうと自分にエールを送った。

そんな風に働き掛けを行っている最中、事件は起きた。

青年の家の7人と、村の子の3人が、夜になっても帰って来なかったのだ。

誰も出掛ける姿を見ていないので、どうやら日の出前からそれぞれの家を抜け出したらしい。

てつきり晩御飯まで遊び回っているのだらうと、この時間まで大騒ぎにならなかったのだ。

大人から子供まで、手が空いている人総出で探し回る事になり……そして魚釣り用の帆船が一艘なくなっている事に気付く。

僕が目を覚ました時には既に晴れていたが、地面には大きな水たまりが残り、まだ緑色をした葉も落ちて、滴がぼたぼた垂れていたのを思い出した。

きつと短時間ながら、突発的な大雨風に見舞われていたの違いない。

そのせいで子供達の乗った船が、沖へ流されてしまった可能性があった。

「おーーーーーい！！ 聞こえたら、返事をしてくれー
ーッッ」

海に向かって叫んでみても返事はない。

日の出前に抜け出したのなら、もしかすると火種を持っているだろうが、真つ暗な海に灯りは見えなかった。

魚釣りの時は必ず陸地が見える沿岸で、と教わっている。

海から見た州の様子や、遠くからでも見えるクロワサント島の山脈の形も、海に出る全員が覚えさせられている。

しかし普段釣りに出ている日中の太陽の位置なら、何となく覚えているかも知れないが、夜の星の位置まで分かっている子は果たしているだろうか……。

そもそも晩御飯までに帰らなければ、騒ぎになると分かり切っている。

そして騒ぎになれば、秘密どころか怒られると……。

それなのに帰って来ないという事は、帰れなくなっているのだ。

お昼ご飯と水くらいは持っていったらどう。

だが突発的な大雨風で転覆は免れても、何の目印もない大海原で彷徨う事になれば、子供達の命は絶望的だった。

「僕のせいだっ！ 僕が海に出たといって言ったからっ！」

物凄い後悔が押し寄せてきて、僕は叫ばずにはいらなかった。

「お前のせいじゃないっ！ おれ達が言い出したんだっ！」

「そっよっ！ ちゃんと見てなかった私達が悪いのよっ！」

青年の家を出るまで、一緒に暮らしていた幼馴染の方がいてもたってもいられないだろうに……。

「いいえ。それを言うなら私達」

「そっだ。自分達が忙しいばかりに、子供達だけで行動しても、問題ないと思ってたんだから」

子供を心配する親の方がよっぽど辛いに決まっているのに……。

「お前達のせいじゃない」

「おちつけっ。誰が悪いと言い合っている場合じゃないっ」

「そっだ。まずは子供達だ」

「大きなかがり火を上げるのはどうかしら？ 遠くからでも見えるように」

「ああ。いいな。急いで準備だっ」

みんな無事でいてくれ。

祈る事はみな同じだった……。

抱負。(後書き)

州長館

村長館・州長館・島長館、そう違いはありません。

実質ちよつと大きめの宿屋。

村の住民以外の人を泊める為に作られたようなもので、昔は村長のくじに当たった村人の普通の民家が館を兼ねてました。

館の住民は村長一家。

基本的に、宿屋部分に、プライベートな空間と、村長室、書類保管室が追加になります。

食事は、村長一家と宿泊客が一緒に取ります。

(希望を出せば、別に取り事も可能)

宿泊客が多い時は、近場の村民が手伝いに来ます。

(役割分担もくじ引きです(笑))

館の目印は、隣に立っている青年の家と、貯蔵物資や共有機材を入れる蔵。

館よりも、両隣の建物の方が大きく目立ちます。

迷子と三枚帆の帆船

僕は10年前と同様、家を飛び出し港へ向かっていた。
遭難していた子供達が1人も欠ける事無く、帰って来たのだ。

しかも帆が3枚も張れそうな、遠洋用の大きな帆船に乗って……！

「全く全く全く！ あいつらッ！」

「全くだ！ 心配掛けさせやがって！」

本当なら港に留まっていたかっただろうに、僕が事務に追われて
いる州長館まで知らせに来てくれた幼馴染と、子供だけで海へ出た
事を思う存分叱ってやると意気込む。

自分が言い出したせいで、子供達は遭難した。

もし子供達が帰って来なかったら、例えまた幼馴染や保護者達が
庇って、許してくれたとしても、とてもじゃないが居た堪れない。

どう償っていいのかも分からないし、子供達の命は償いきれるも
のではなかった。

遭難から日が過ぎ、子供達の生存の可能性が低くなるにつれて、
僕は北の州から逃げ出す事ばかりを考え、せめてその前に頼まれ
ている書類だけはしっかり終わらせておこうと、かがり火を灯す寝
ずの番以外では州長館に籠っていたのだ。

事務さえも子供達が遭難した事実から、目を逸らす行為だった。

だから実際帰って来た子供達の姿が見えた途端、大急ぎで走ったせいで声は詰まるし、おまけに目から汗まで出て、僕の視界は完全に滲んでいた。

「エイブお兄ちゃんまで泣いてるよう」

「当たり前だつ！ほんとに心配したんだぞつ！」

拳骨を喰らわし、しっかりと抱きしめる。

良かった。

10人ちゃんとそろっている。

揉みくちやにしてくる親方の腕をすり抜けて、最後にバナが僕に駆け寄って来た。

「エイブお兄ちゃんなら褒めてくれるよねっ？バナ、一生懸命潮と風の流れを読んだんだつ。」

ほかの皆はぜんぜん駄目なのっ。バナ、頑張ったよっ」

「うん、うんっ。よく、……よくやったな、バナ！おかえりっ！」

「えへへ、ただいまっ！」

10人全員を抱きしめて、やっと僕は落ち着いた。

よく見ると帰ってきた子供達は、みんな揉みくちやにされ、目を白黒している。

元気そうではあるけれど、ちょっと顔色が悪い。

「バナ、お腹すいてないか？」

「すいてる〜。おにぎり食べた〜い」

「焼きおにぎり〜」

「ぼくはおもちがいい〜」

「善哉だと更にいいよな〜」

……強者がいる。

当然、皆から一斉にどつかれていた。

「もうすぐお昼だし、今日はみんなでここでお昼にしませんか？」

「だな。今日は仕事になりそうにない」

親方が乗ってくれた。

「じゃあ、ちようどいいかねえ。一緒に色々持ってきてもらったんだが」

「おばあちゃんっ!」

一斉にバナ達がおばあちゃんに駆け寄る。

「うん。元気そうだね。良かったよ」

「おばあちゃ〜んっ!」

抱きついてバナ達が大泣きしだした。

「おばあちゃん。お足のほうは？」

「大丈夫だよ、女の子達が連れて来てくれたからね。みんなも元気

「そうだね」
「はいっ」

周りの大人達が、おばあちゃんにくつついた子達を引き取りながら、凄く嬉しそうに声を掛ける。

おばあちゃんに面識のない大人達は、周りから聞いて、
「北の賢者?!」
一斉に驚いた。

「だろうなあ。」

年配の者は病で皆亡くなっているし、おばあちゃんが生きてるのは奇跡だ。

「おばあちゃん、椅子」
「ああ。ありがとう」

「エイブ、すぐに食べれそうな物ばかり持ってきたよ」
「気が利くなあ。ありがとう」

周りを見ると、かがり火から火種を取って簡単なかまどを作り、おもちやら干物やらを焼き始めていた。

さすがおばあちゃんと青年の家の女性陣。

「おにぎりあるっ?」
「あるわよ」。ご飯は炊けてるから、急いで握るわね」
「やったあっ!」

さっきまで大泣きしていたのに、ケロッとしてバナもおにぎりを

握りに行ってしまった。

「家から何か持ってくるわ」

「うちも」

「鍋とかお皿とかもいるわよね」

みんな一斉に動き出した。

「エイブ、良かったねえ」

「はい……っ」

僕がおばあちゃんに頭を撫でられ、ちよっとぼくっとしてしまっている間に、宴会の準備が終わってた。

おばあちゃんを中心に円座になって、子供達から詳しく話を聞いた。

突発的な大雨風に見舞われて流されてしまったまでは想像通りだったのだが、流れ着いた先がどうやらロウノームスに行く航路の途中になる小島だったらしい。

なんと、その小島には真水の水場まであったそうだから。

子供達はその小島に座礁していた大きな帆船の損傷の具合を見て、水没しないぐらいまで手を入れて、州都まで乗って帰って来る事にしたのだそう。

幸運と、バナの才能がなければ、とても無事では帰って来れなかったに違いなかった。

次の日の朝早く、僕は三枚帆の帆船を見に行った。

「皆を連れて帰ってくれてありがとう」

帆船に感謝を囁き、眼を閉じしばらくメインマストに抱き着いていた。

「……エイブ、いいか？」

「わあっ。びっくりさせないで下さい、親方っ」

後ろを見ると、親方と数人の大人がそろっていた。

「すまんすまん。ちょっと話があつてな」

「はい」

しまった。

どれだけ抱き着いたままだったんだろう。
恥ずかしすぎる。

「この船の事なんだが」

「どうでしたか？」

「うん、いけそうだ。ただ大分手を入れなきゃいけないみたいだ」

「そうですね、お任せします」

「おう。任された」

快諾してくれたけれど、親方の表情が晴れない。
後ろの大人達も顔を見合わせて落ち着きがなかった。

「座りませんか？ 話が長くなりそうです」
「分かるか？」

「はい。この船の管理についてですよね」

「そうだ。お前が常々気にしていた事が、この船で一気に大きな問題になった」

「はい」

これまで舟は村の共有で、好きな時に使う事が出来た。

だが、この船は特別なのだ。

遠洋にも行く事が可能で、しかも大きさが桁外れ。

誰かの一存で動かすのは危険すぎる。

一気にざわざわしだした大人達と円陣を組み、僕らは船の上で時間をかけて相談をした。

僕が20歳の秋。

州都の皆の意見を何とか取りまとめ、北の州は他の州に先駆けて青年の家の状態を元に戻し、更にくじ引き制度再開に漕ぎ付けた。

そして幼馴染の1人に押し付けられたくじを見て、僕は棒立ちし

て固まる。

「あ、あのくもしもし？」

それは、州長のくじ。

それをなぜ自分が押し付けられるのか、サツパリ謎だ。

しかし幼馴染は涼しい顔をして、告げる。

「エイブに貸し1つって言ったろ？」

「いつの話だよ！ 覚えてないぞ？」

「ほら。前に、海図の大判本を探してやっただろ？ その時の貸しを、今コレで返してもらおっかな！」

「な……っ」

言われて初めて思い出した、借り。

「って事で決まりな！ よろしく！」

「……。……や、いやいや、でも。まずいだろっ？」

15歳からもう5年間もお飾りやってたんだぞ、僕。更にもう10年は、職権乱用、腐敗の元凶だって！」

なかなか理論的な切り返したと思ったのだが、幼馴染の涼しい顔は全く崩れなかった。

「大丈夫だろ、うん」

「……おいおいおい」

「誰も反対しないって」

「そうそう」

幼馴染達に押し切られ、更に親方にまで睨まれた。
州長を引き受けないと承知せん！ という意味らしい……。

そうして僕は州長を続投する事になってしまったのだった。

迷子と三枚帆の帆船（後書き）

新造帆船

「静かにな」

「おう。ばれてないよな」

「……大丈夫だ」

オレと幼馴染は、体調が悪いのを押しして港に来ていた。

オレが設計した三枚帆の帆船が、新航海に出る前に焼き払われようとしていたからだ。

このまま沈められるのは悔しく、幼馴染と相談して焼き払われる前に、海に航海に出す事にした。

行く当てのない乗組員のいない航海だが……。

「……手伝おう」

後ろから声を掛けられた。

「親方っ！」

「しっ！ 静かにっ！」

声を掛けられ、ビビった俺達に親方が落ち着けと手振りしてくる。

「……親方、体調は？」

「お前達と同じだ。だからこそ来た」

「親方……」

「行くぞ」

「はい」

親方が連れて来てくれた先輩達と帆船に乗り込んだ。

「こいつを一の島に連れて行くぞ」

「え？」

オレ等はハモってしまった。

「こいつは絶対残しとかなきゃならない。これは奴も同じ気持ちだ」

「州長が……」

「帰れない旅になるが着いてきてくれるか？」

「もちろん覚悟の上です」

「おしっ！ 出港するっ！」

「はいっ……」

暗闇の中、静かに帆船は出港した。

他州の人々。

僕が州長を続投した頃から、北の州には他州から人が流れて来る様になっていた。

クロワサント島の現在の全体像が知りたくて、僕は進んでそんな人々の話を聞くようにしていた。

「どこからいらつしやいましたか？」

「島都……南の州から、だ。」

「病はどうなってます？ どんな状態ですか？」

「島都にはロウノームスからの使者が逃げて来て、滞在していたせいで、9割近くの住民が死んだ。今は鎮静状態だ」

「ロウノームスの使者は無事に島都に着いたんですね」

「ああ。着いてくれない方が良かったな」

「そうですね」

ロウノームスの使者達がちゃんと病について報告してくれてれば、クロワサント島の被害はここまで広がらなかったはずなのだ。

「使者達がどうなったか知りませんか？」

「奴等は皆死んだと聞いた」

ああ、恨んでるなあ。

僕もロウノームスの使者の対応に思う所あるし、当たり前だよな

あ。

「ご飯とお風呂を用意してあります。今日はゆっくり休んでください」

「ありがとうございます。仲間と家族、よろしく願います」

「はい」

基本的に逃げてくる人達は家族連れが多かった。皆一様に疲れ切っている状態だった。

「自分は南西の州からここまで逃げてきたが、聞いたところによると7・8割は亡くなってるみたいだ」

色々な州から人が流れてきた。

どうやら流行病はここ北の州と、島都の南の州が一番酷かった様だ。

それにしても……。

「おかしいよなあ。なぜ北の州はこうなんだ？」

「まったくだ」

他州から流れてきた人々の話を聞いていると、つくづく感じるのだが、北の州の女性陣は遅い。

危うくそれを声に出そうとした時、いつから聞いていたのか、思わず顔を見合わせた僕と幼馴染（男）のつぶやきを、しっかり拾った女性陣の声が割って入って来た。

「もちろん私達がしっかりしてるからよ」

例えば、後先考えずに走り出すように発案するのが僕だとしたら、そこへ辿り着くまでの段取りや道筋を整えていくのは、大概において女性陣だった。

それに追い立てられるのは男性陣で、そうされる事でやる気も出たし、散々助けられもして心強いのだが……。

僕といい、幼馴染（男）といい、女性陣には全く頭が上がらない。そんな女性陣を押さえ付けるとは、他の州は何と恐ろしい事を。そして非常に勿体無い事をしているなあとと思う。

「そうだねえ」

「うん。お前達のおかげだ」

「当然よ！」

あゝ、やばかった。

離れていく姐御な幼馴染達を見送って、僕等は冷や汗を拭いた。

北の州と他州の違いは、流行病後の対応の差だろう。

北の州はクロワサント島における流行病の元だったから、ここ最近まで他州から人が流れて来なかったのも一因かもしれない。

クロワサント島は本来男女同権で、女性は子供を産む存在として大事にされている。

流行病の前はくじ引き次第で、村長・州長・島長を女性が勤める事もあったくらいに。

しかし流行病を防ぐ為の州境封鎖に始まり、食糧や薬草の統括等は、どうしても力づくによる対処が多くなる為、自然と現場は男性が指揮権を握るようになっていった。

流行病による世情不安で、荒事に対応したそれぞれの州長もしくは、その州長の血縁者が治安部隊の隊長が権力を持ったのだ。

指揮権 〓 決定権。

人口が減ってしまった為、餓死者が出るほどではなかったが、ここ数年クワワサント島は不作気味で、流行病全盛期にはその収穫を行う人手がおらず、また収穫物の分配は権力を握った者の個人的認識で行われ、更なる不公平と格差がもたらされているらしい。

「最初はまだマシだったんだ」

「ああ。年々酷くなっていったな」

「お前の所もか」

「ああ。そつちも？」

「だな」

1人が言い出すと、また別の場所から声上がる。

「今では州長とその周りだけが豊かで、あとは皆喰うに困る者が増えるばかりだ」

「うちもその口だわ」

僕は思わず不思議になり、質問を挟む。

「州長に諫言する事は出来なかつたのですか？」

「最初は居たんだ」

「だが、あまりに病の広がりか酷すぎた」

始まりは、州境の警護や収穫物の保護などの治安維持部隊だったのに、今では州長の権力保持に使われていて、都合の悪い人間は排除されていくらしい。

州長に諫言出来る人が居なくなり、ますます貧富の格差が広がる一方だという。

「どうやって州境を越えて来たんですか？」

さらに問い掛ければ、口々に逃げ出した際の様子を答えてくれた。

「オレは、州境を見張っている人物が情けを掛けてくれた」

「お前、誰かに口答えしたのか」

「分かるか？」

「当たり前だ」

「そんな貴方はどうなのよ？」

「なけなしの金をはたいて見張りを懐柔したさ」

「同じかつ」

話を聞いていた人達がお互いに肩を叩き苦笑いした。
苦笑いだが笑顔が見れた。

良かった。

「州境はまだ閉ざされたままなのですか？」

「自由な行き来は許されていません」

「たまに他州から商人が州長の所に来ているって聞いたわ」

「州境で金を渡すか、州長からの通行許可印を貰っているらしいな」

「あとは、俺達みたいに無断で抜けて来るかだな」
「確かにっ」

今度は大笑いになった。

いい事だ。

僕もつられて笑ってしまった。

相変わらず州境は閉ざされたままだが、流行病が蔓延していた時のように、見つかったが最期死罪という事はないらしい。

これまでの北の州と同様に、流行病の発生時から、くじ引きはどの州でも行われていない。

くじ引きが行われていたら、ここまで権力の集中は行われなかったんじゃないかと、話を聞きながら僕は思う。

色々な話を聞いた僕は頭を下げてお礼を言った。

「他の州の事を話して下さい、ありがとうございます」

「いやなに。こんな話で役に立っただろうか？」

「もちろんです。北の州にはここ数年ずっと誰も来なかったので、島の様子が分からなくて不安になっていた所だったんです」

「こちらこそ受け入れてもらえてありがたいわ」

「生まれ育った場所を、故郷を捨ててしまったという思いは消えやしないが、こちらでも聞いてもらえて少しスツとした」

「そういつて貰えると助かります。あと、何か足りない物とかありますか？」

他の州から来た人達には寂れた村の開墾に回ってもらっている。

もちろん食糧や道具などの援助はしつかりした為、大きな不満は出なかったが、本当なら故郷に留まっていたかった人達ばかりだ。

「こちらとしては定住大歓迎ですが、北の州の技術を習いに来た、とか、逆に授ける為に来たとか……とりあえずそんな風に考えてみてはどうでしょうか」

「ははは。技術習得希望の移動は20歳までだけどなあ」

「裏別名、嫁探しの旅だもんよお」

技術習得希望の移動間に恋愛関係が出来て、そのまま移動先で生活をするもあり。

その相手を自分の生まれた村まで連れて帰るもありなので、そんな風と呼ばれているのだろう。

「そついや、お若いの。州長らしいが、嫁はいるのか？」
「……うっ」

そうキタか……。

喉を詰まらせた僕を、嫁どころか、お嫁に来てくれそうな恋人もおらず、婿に迎えてくれそうな女性もいないと見抜いたらしい人々が表情を和ませた。

「まあ、がんばれやっ」

「……はい」

ちよつと半泣きになったが、とりあえず頷いておいた。

州長の嫁つて雑用係に来てくれる子いるのかなあ。

10年州長辞められないし。

ホント切実です……。

他州の人々。(後書き)

手紙

拝啓

父上、母上、お元気ですか。
自分は元気にやっています。

急な話なのですが、今度結婚することにしました。

相手は、たまに手紙に書いてたあの子です。

(分かるでしょうか？(笑))

5年前、製陶技術を学びたくてここまで来た自分ですが、こちらに来る前に『嫁さん連れて帰ってこいよ』という励ましを、そのまま実行する事になるうとは全く思っていませんでした。

裏別名、恐るべしです……。

今度一緒にそちらに帰ります。

皆に会うのも久しぶりだなあ。
今から本当に楽しみだ。

あ！でも大騒ぎにはしないで下さいよっ！
恥ずかしいですか
らっ！

では、また近日中に。

敬具

P・S・ 姉さんには絶対に言わないで下さいよ！ 姉さんにバレたら絶対お祭り騒ぎに巻き込まれる。頼みます。

「もう見ちゃってるのにねえ」

「ホントホント」

「……」

「楽しみねえ」

「ホントに」

座談会。

逃げてきた人達から他州の話を聞いた僕達は、おばあちゃんに愚痴りに来た。

「どう考えたっておかしい。人口は減ってるのに食べられない人が出るなんて」
「そうだねえ」

「皆で生産して平等に分ければ絶対平気なはずなのにっ」
「だなあ」

「お腹一杯食べられないのは辛いものねえ」
「まったくだ」
「うんうん」

そのまま晩御飯に突入し、青年の家の皆にまで愚痴っていた……。

「だがエイブ、クロワサント島は昔から村ごとの自治が決まりだからねえ」
「そうですねえ」

一見的にちゃんと治まっている他州に手を出す事は出来ない。

北の州に逃げてくる人は居るが少数だし、大多数の人達は平和に暮らしているからだ。

でもその平和は抑え付けられているからそう見えるというだけで、

しかも権力を握っている一部の人々以外は飢えている。

「え？ 援助物資を勝手に流す事は出来ないのか？」

「そうなんだよ。下手すりゃ村自治への干渉って事でこっちが非難されるんだ」

「お腹がすいてる人に対しての炊き出しもダメなの？」

「基本的に炊き出しは、その村の村長が音頭を取ってやるものなんだよ」

僕はむくつと呻る。

「変なの〜」

「その為の蔵物資だからなあ」

「なるほど〜」

頷きもするが、また新たな疑問が沸いた。

「あれ？ じゃあその村長が本当に変で、村民に助けが必要って時はどうするの？」

「その時は州長だね」

「州長が駄目な時は？」

「島長になる。争い事の最終判断も島長がするんだよ」

「へえ〜」

基本的には良く作ってある決まりなんだよなあ。

ちゃんと動いてればって所が、今回はネックになってるけど。

でも、どうにかして援助物資を送れないかなあ。

お腹一杯食べられない日々が続くのは、どう考えたってキツイ。

「他の州もとりあえず喰うに困る状況からは抜け出させたいよなあ

……」

そう僕がついポロつと零すと、女性陣にニヤリと笑われた。

「やっぱり！ そろそろ何かやらかしたいって言い出すと思ったんだっ」

「え〜っ。あたしはエイブがまたいきなり全島でくじ引き再開って、唱えると思ってた。ちよつと予想と違ったなあ」

「ホントだよ〜。そしたらタコ殴りに出来たのに〜」

「学習能力ないのっ！ て、ねえ」

「……」

ひいッ、……言わないで良かった。

絶対ホントにタコ殴りされてるっ！

「「「くらくら、お前達

「「「は〜いっ」

これだからエイブは……男共は……という話にまで発展しそうになったところで、おばあちゃんが止めに入ってくれた。

う〜〜〜。

相変わらずグサグサと、胸に刺さる事を言ってくれるよなあ。

ホントの事だから、反論出来ないけどさあ。

おばあちゃんしか女性陣を止められないし、居なかつたらと思つと恐ろしい。

もう青年の家に足を向けて眠れません！

そんな僕に、男性陣からは憐みの視線が寄せられている。さらには、肩まで叩かれた。

同情してくれるなら、止めてくれよ……。

僕でも女性陣の勢いを止めるのは、無理だと思っけどさあ。むしろ何倍返しを食らうのがオチだと、震えが走る。

ともあれ最終的には全島くじ引きに持って行きたいと僕が思っている事を、絶対一言も言ってないはずなのに、既に女性陣は見抜いているらしい。

女って凄い……。

「でもさエイブ、簡単に言うけど、北の州だけで全島分の援助物資なんて無理だぞ」

「うーん、それは分かつてる」

北の州もだいぶ落ち着いては来たが、まだ復興途中なのだ。自分達の活力の元である食糧まで他人に分ける余裕はない。

あくまで我が身第一なのだ。

僕は父のように命までは懸けられない。

「それに他州の州長を通したんじゃ、そのまま着服されて本末転倒

……なんて事になるだろうし」

「そうだよなあ」

「え〜っと、つまり、どこから・どれだけ・どうやってが問題なのか？」

「誰に。も問題だと思っぞ」

「「う〜〜〜ん」」

打って変わって、みんな真剣に考え始めた。

食えない人を助けたいのは皆も同じなんだなあ。

でもすぐに出来るもんでもないし、自分達も一杯一杯の日々を送っているのに。

ホントにいい奴等だよなあ。

「逃げて来た人達が頑張って開墾してくれてるおかげで、今年の収穫量は上がると思う」

「うん。これまで州長館で暴利を貪ってた人も、心を入れ替えたみたいだし、その分も浮くかなあ」

「ハイ。その節は叔父叔母を止められなくて、すみマセンでした」

ついに訪れた良い機会だったので、口調だけは茶化しつつ速攻僕は手を付いて謝った。

「いえいえ」

「はいはい」

それに対する幼馴染達の返事も実に御座なりだったが……。
でもそれで充分だ、お互いに。

「とりあえずその少し余裕が出来る分を、他州に持って行くのはどうかな？」

「ほらあ、エイブ。メモメモっ！」

「……また僕？」

「当然」

思いつきり不本意を態度で示したのだが、一斉に頷かれて僕の気分は途端にブルーだ。

僕ってお飾りじゃなくなってるはずなのに、州長ってこんなものなのか？

流行病前の父はどんな風だったっけ？

内心ぶつぶつ零しながら、それでもしつかり文字に起こしてしま
う僕って頑張ってるよなあ……。

「佃煮や干物なら日持ちするから、他州に回すのもいいかも」

「それ貰ったつ。海の生き物を食べても大丈夫だって、まだ知らない村があるかもだし？」

援助物資をどこから工面するかの目途は尽き、話題が変わる。

「離れてる州にまで運ぶのは大変そうだ」

「輸送方法も考えなきゃな」

「他州も舟を直してるかな？」

「海で他州の舟は見た事がないぞ」

「今度、逃げて来た人達に聞いてみよっ」

「ああ。いいね」

陸路で馬車の輸送より、先に舟が浮かぶなんて。

クロワサント島が島である以上、やはり海とは切っても切れない関係なのだと思っ。

「その時に信用出来る人も紹介してもらえるといいね」

「そうだよねえ」

「州境は前より厳しくないみたいだし、連絡さえ取れば、食糧は渡せそうだもん」

ふと気が付けば、おばあちゃんが感心したように何度も頷いている。

「おばあちゃん……？」

「みんなしつかりこの10年の経験を生かしているねえ。そろそろおばあちゃんの知恵袋も必要なくなりそうで、嬉しいよ」

「なっ！ おばあちゃんはず〜つとず〜つと必要ですからっ！
寝たきりになっても、口がきけなくなってもですっ」

僕にとって、おばあちゃんはその存在自体が癒しなのだ。

別に幼馴染の暴走だって止められなくなったって、居てさえくれ

れば構わない。

ただ褒めて貰えるだけで本当に嬉しい。

おばあちゃんが居るといっただけで落ち着けるのだ。

おばあちゃんの口調はあくまで穏やかだったが、何だかすぐにもいなくなってしまういそうな気がして、僕は立ち上がって駆け寄り、その手をぎゅっと握った。

座談会。(後書き)

クロワサント島の輸送

島の東西に山脈がある為、大量輸送をする場合は舟を使う事がほとんどです。

まず海路で目的地に一番近い港まで運びこみ、そこから川船に越し替え川を遡る。

ただクロワサント島の川は、山から駆け下りてくる急流が多く、川船を遡らせるために河岸から川上に引っ張っていく方法が良く取られました。

川がない地域への輸送は、馬車・牛車・驢馬車などに移し替え、陸路を移動します。

流行病の流行前は、青年の家の技術習得の為の移動による結婚などから、州間の移動も多く物流も盛んでしたが、

流行防止の為に州境が閉ざされた事により、物流が途絶え、エイブが他州への援助を希望し始めた時には、人が通らない為に陸路はどんどん消え、残っていても獣道に近い状態になっています。

抜け道と前契約。

「じゃあ、この道なら通れそうですね？」

「ああ。確か俺達はこの道を通ってきたはずだ」

クロワサント島の地図を覗き込み、僕は話し合いを続けた。

まず陸路での輸送が消えた。

他州から来た人達からの情報で、この10年、人がほとんど通らなくなつた為に道が消えていたのだ。

残っている道も獣道に近いらしい。

獣道では馬車を仕立てる事も出来ない。

食糧は高張るし重い。

人力のみでは輸送は厳しい。

「そうになると、輸送は船だな」

「でもそうすると……」

「港だな」

話し合いを続ける中、さらに別の問題が出た。

「うん。港の現状はどうなってますか？」

「州都以外の港は、ほぼ使われてないと思う」

「まず人が居ないしな」

「でも州都の港はダメよ。見張りが多すぎるわ」

「う~~~~ん」

州都以外の港の現状が分からないとなると、座礁しない様に舟を動かすには、船頭の腕だけが頼りになる。

だが実際の所、北の州もやっと数年前に舟を扱い出した所だ。皆そこまで操船に熟練していないのだ。

そうなる、思い当たるのは……。

「バナに頼むしかないか」

「ああ。だがバナに頼むとなると、ちゃんと話は詰めとかないとまずいぞ」

帆船の船長〓舵を取る人〓航海の指揮者〓バナ という図式が頭に浮かぶ。

「うん。一度向こうの人に会って、ちゃんとお願いするしかないな」

自然の流れで僕は口に出したのだが、なぜか幼馴染達からストツプが入った。

「おい！ エイブが行くのか?!」

「当然っ!」

「うがぁ!」

「何考えてんだバカっ! お前州長だろっがぁ!」

「俺らが行くっ」

そして一斉に、幼馴染達が僕の頭を押さえ付けてくる。

う、動けない……。

「何でだよ。お願いするなら、州長の僕が動いた方がいいだろ」
押さえ付けられながらも、僕は言うのだが……。

「アホかつ！」

「お前が動いて何かあったら、北の州はどうなるんだよっ！」

「え。親方達もいるし。北の州は落ち着いてるし、大丈夫だろ」
何かあったら……なんて事を考えたらキリがないし、実際に僕の代わりなんていくらでもいると思う。
なのになのにな。

「もう喋るなっ」

「案内お願いできますか？」

「ああ。任せてくれ」

僕の頭の上で、話がどんどん纏まっていく。

「じゃあ、南西の州は」

「おう。オレが案内する」

「北東の州は？」

「おれだ。よろしく頼む」

どうやら島都がある南の州以外の、8州に物資を送る事に決まり
そっだ。

島都がある南の州へ下手に手を出すのは、時期尚早だろうという

判断から8州になった。

「大勢で行くと、見張りに見つかる可能性が高くなるんじゃない？」
「州境を越えるんだ。少人数で行くしかないな」

「じゃあ、コメの収穫までに戻ってこなきゃだし、8組送ってそれ
ぞれ話を決める方が早くていいんじゃない？」

「いいね。各州にはそれぞれ案内役とボク等の1人でどう？」

「まあ、途中までは一緒に行けるだろ。それぞれの州に近くなった
ら分かれて行けばいい」

「いいですね。じゃあどこの州に行くか、こっちも決めときます」
「分かった」

ちくしょく押さえ付けられてる間に、どんどん話が決まってい
く。

釣り舟の時と一緒だよ。
また仲間外れかよっつ。

「エイブ、次行くぞ」

「お前が北の州にいるから、俺達は自由に動けるんだ」

「そうそう。しっかり州長よろしくね」

「うっ~~~~」

やっと頭の上の重しをどけてくれた。

恨めしそうに幼馴染達を睨んでやったが、相手は笑って返しやが
る……。

くっそ〜っ！　いつか絶対出かけてやる〜！！

いやいや、落ち着け僕。

このままだと今日の話し合いから絶対追い出される。

深く深呼吸し、次に話し合わなければならない事に頭を切り替えた。

「相手の当てはありますか？」

「ああ。ある」

「それは任せといてくれ。絶対変なのは紹介しない」

「はい。お任せします。あと援助物資ですが、貴方達が収穫した物を当てようと思ってます」

「おれ達の?!」

「ええ。貴方達の」

一斉にざわつきが起こった。

「北の州の者の中には、自分達にゆとりがある訳じゃないのに、援助物資を出すのはおかしいと考える者もいます」

「おい、エイブ」

確かに本当の事だが、なぜそれをわざわざ言う必要があるんだと幼馴染達は訝る。

それに対し、安心させるように微笑んで、僕は続けた。

「でも、貴方達は違う。貴方達にとって、他州の人達は仲間です。仲間に対する援助なら納得出来るし、それぞれの州長も目くじらは立てられません」

さらにざわめきが増えたが、無視して先に進めた。

「もちろん北の州の皆からの合意済みですが、こちらも無断で援助物資は送れないんです。

なので今回は皆さんからの援助物資という事で、輸送費のみを支払って頂く形になります」

「村自治か」

「うん。そう。ちょっとした抜け道だね」

「考えたなあ」

北の州として援助をしたくない人もやはりいたので、その点も配慮した結果である。

ホントに考えたよ。

考えすぎて頭の中がしばらく動かなかったぐらいだ。

「え？ 干物とかは今回なし？」

「干物は今回僕ら輸送は初めてだから、初めての契約者に対するオマケだね」

「オマケ！」

「それイイっ！」

一斉に場が沸いた。

「輸送費の代金は出来た時にお支払頂くといい事で、僕等は皆さんの希望先に物資を運ぶ。

受け取った皆さんは州都まで運び、闇市場を開いて物資を捌く。という感じでどうでしょうか？」

僕は持ってきた流行病前の輸送に関する書類を見せ、さらに作ってきた書類をそれぞれに渡した。

「いいんじゃないか？」

「うん。ありがたいくらいだ」

どうやら8等分した輸送費の請求書についても、避難して来た皆さん納得してくれたらしい。

「あれ？ これ物資を渡した後はどうなるんだ？」

ああ、気づかれたか。

「そこから先は、それぞれの州の皆さんにお任せします」

また一斉にざわめきが起こった。

「タダで配るのも良いとは思いますが、輸送費の支払いがありますからね。」

こちらの輸送費分と、州都までの輸送を頼む分。

あと保管についても考えて、良心的なお値段にして貰えると嬉しいです」

「こちらで値段設定できるのか？」

「ええ。皆さんの方が他州については詳しいですから。いくらでな

ら購入出来るか、その辺はそちらで相談して下さい」

書類を見直して値段についての相談が始まった。

ほっと一息ついてると、横から

「なあ、引き渡しなんだけど、間違った人に物資を渡すとまずくないか？」

「バナだしねえ。ちゃんと決めといた方が良いつて」

「うんうん」

「……」

おゝい、バナ。

お転婆でおつちよこちよいなのは知ってたけど、青年の家の兄妹にここまで信用ないのはまずいんじゃないか？

つい胸の中で突っ込んだりしたが、今回はバナよりも、間違いを出さない方が重要だ。

8州それぞれの担当になった人達が船に乗り込む予定なので、バナだけが物資を引き取りに来た人達と相對すると決まったわけではない。

しかし港の現状が分かるまで、海の状態を知る才能を持つバナは毎回参加する事になるだろう。

「どつする？」

「うん」

すぐにはいいアイデアが浮かばなくて、つい腕組みして悩んでいと幼馴染の1人が、

「あれはどう?」

壁に掛かっている鍋敷を指さして言うて来た。

「鍋敷?」

「うん。あんな感じで模様を木彫りして、半分に分けて、絵が合ったら引き渡しをする」

「きれいだし、いいわね」

「きれいな物はバナも好きだし、早々無くさないだろ」

「「だな」」

決まりだ。

「8つ任せたっ」

「「任せたっ」」

「おれっ?!」

木工仕事が得意なダニヤルに押し付けて、

「やく無事に決まって良かったね」

「「うんうん」」

「ちょっと待て〜っ」

1人涙目なダニヤルを置いて、僕は幼馴染達とほのぼの笑った。

>
i
3
4
7
9
6
—
4
2
7
9
<

抜け道と前契約 (後書き)

本契約

「じゃあ、これで決まりという事で」

「よろしく頼む」

しっかり握手をぼく達はした。

ここまで来るのが、まず大変だった。

なんでこんなに道が寂れてるんだよおおおおお!!
疲れてなかったら、絶対大声で叫んでたっつ!!

村で親方達から、

「エツド。お前達にはかり実行部隊を頼んでしまつてスマン。だ
がお前達が動かなければ、エイブが動くだろう。今エイブを北の州
は失う訳にはいかないんだ」

真剣にぼくを見つめ頼まれちゃった手前、途中で絶対へばれな
かつたしな……。

それに親方の言う事はとてもよく分かった。

初めにエイブがくじ引きを言い出した時には、皆で一蹴したが、
今では他の誰でもないエイブが先頭に立っているからこそ、ぼく達
はこうして意見を交し合い、実際に動いているのだ。

「物資はコメの収穫が終わってから此方に持って来る事になります」
「頼むっ」

「……あと、これなんです」

ぼくは胸元から木彫りのペンダントヘッドが付いた首飾りを引き出した。

「とりあえず、こっちは終わらせた。後は寝てからやるっ！」

ぼく等に1個ずつ押し付けるとぶっ倒れた、三晩完徹の超特急仕事をしたダニヤルの力作である。

ちよっとしみじみ見てから手渡した。

「これが物資の引換替わりです。物資受け取りの時には持って来て下さい」

「引換ですか？」

「はい。これがないと物資を渡せませんので必ず持って来て下さい」
「分かりました」

「ぼくがこの州の担当になっていきます。今だけじゃなく、平和になつてからも末永くお付き合い頂けると嬉しいです」

エイブだったら絶対言ってるだろう事を付け加え、契約書を持つ

てぼくは意気揚々と北の州に帰った。

出航。

今日の北の州はちょっと違う。

早朝から皆して浮き足立っている。

三枚帆の帆船“輝ける白”が、とうとう本格的に遠距離航海に出るのだ。

他州への援助物資の輸送を船ですると決めたその時から、使う船は援助物資の量からして“輝ける白”しかありえなかった。

親方には無理を言っつて、修理を急ピッチで進めてもらい、進水式もそこそこに僕等は練習航海に出港した。

なのに……船酔いした。

こんなに船が好きなのに、何でだよおおおおお！

まあ、僕だけじゃなかったのは救いだったが、沖に出た途端に吐き気が込み上げ、役に立つ所か、皆に迷惑かけまくってしまった。

情けない……。

これは、航海乗員を慎重に決める必要があると、まず船酔いする僕と、同じく船酔いをする仲間がメンバーから外された。

さらに州民から出た乗船希望者のうち、身軽な者と青年の家のメンバーで、何度か練習航海を行い、その中でも特に海に強そうな年長者をベースに、今回の航海乗員は決定された。

もつともバナと、相手側の顔確認の為、8州の代表者と契約を交わした幼馴染達は強制乗船だ。

「いいな。危なかつたら無理はせず帰ってくるんだぞ」
「行かなくてもいいのよ。陸から皆で運ぶって手もあるんだからね」

航海乗員の中で最年少なのが、バナ。

その最年少が一番重要な舵取りをするんだから、北の州の大人達は、もう皆が心配した。

バナの才能は、北の州の皆が認める所だが、今回の航海にどうしてもバナが必要だった訳じゃない。

だが、成功率を高める為にはバナが舵を取るのが最適だった。

まあ、強制乗船の幼馴染達ならバナの補佐として最強メンバーだし、周りの皆もきつとバナを盛り立ててくれる。

不意の事故があっても航海乗員の皆なら大丈夫だろう。

でも大海原を航海かあ。

気持ち良さそうだよなあ。

船酔い体質が恨めしい……。

今回の航海乗員の中には、無理矢理に自分の乗船を認めさせた猛者がいる。

「お前等が超ぶっつけ作業させた首飾りが、ちゃんと合うか気にな
って眠れないんだっ！ おれも連れて行けっ！」

ダニヤルが名乗りを上げたのだ。

「ダニヤルも僕と一緒に船酔い体質だろ？ 大丈夫？」

「ヤバくなったら“輝ける白”に木彫りして心頭滅却し、船酔いを
ブツ飛ばすっ！」

「練習航海中もそれで乗り切ったのか？」

所々に模様が増えている“輝ける白”を見回して僕は尋ねた。

「当たり前だ！ それに木彫り模様が合わなかった時に本物かど
うか分かるのは、おれぐらいだろ？ 修正もしたいから、どうし
ても行きたい」

確かに彫った本人なら確認出来る。

先に他州に渡す分だけ彫って、残りを後から彫ってたし、ちゃん
と模様が合うか気になる所だけど、好きな作業で精神統一し、船
酔いをぶっ飛ばしちゃうのは凄いやなあ。

「超タイムトライアル作業を押し付けたのは、ぼく等だしね。ダ
ニヤルは練習航海でも船酔いをホントにぶっ飛ばしてたから大丈夫
だよ」

どうやらエッドが面倒を見てくれるらしい。

「まあダメでも命綱着けて海に放り投げれば、ダニヤルの目も覚めるでしょ」

「さすがフィシャリ」

「どついつ意味よ」

睨まないで下さい。

青年の家出身の姐御達の中でも、一本筋が入っている貴女への賛辞です。

フィシャリが居てくれれば“輝ける白”は安泰だ。

ホントに航海乗員はバツチリ。

後は何事もなく無事に帰って来て欲しい。

「エイブお兄ちゃん、荷物積み終わった」

バナが僕の所に報告に来た。

とつとつ出港だ。

今回の航海乗員以外はすべて“輝ける白”から降船し、残るは今回の乗員達のみ。

何故か僕の所に集まってきた乗員達と顔を合わせ、僕は右手の甲を上にして差し出した。

バババツとその上に手が乗っていく。

最後に左手を一番上に乗せた。

「長い船旅になる。安全第一で行ってくれ」

「おうつー!」

僕はギュッと上から押さえ付けられた手を下から跳ね上げ、エールを送る。

「おつしゃあっ! 出港するぞっ!」

「おー!」

一斉に皆がそれぞれの担当場所に散っていく。

“輝ける白” 皆を頼む。

メインマストを撫でてから、僕は後ろ髪を引かれるが振り向かずに地上へと戻る。

「大丈夫だ。いざという時の対処法はしっかり教えた。」
親方が戻った僕の肩に、手を置いてくれた。

「はい。エッド達もそれぞれの州からの帰り道は覚えたって言うてくれました」

「なら安心だな」

「はい」

沖へと進んでいく“輝ける白”を、その場からしばらく動けず僕は追い続けた。

「エイブ、いい加減信用してやりなさい」

珍しく青年の家からおばあちゃんが出て来て、僕に声を掛けてくれた。

“輝ける白”が気になって、ここ数日上の空で仕事をしている僕を見かねたらしい。

「そうは言うけど、おばあちゃん」

「エイブ、お前の仕事は？」

「……北の州の州長」

「そうだ。お前の仕事は、出掛けている者がちゃんと帰ってこれる場所を残す事。今の日常を継続する事だよ」

「だけどっ」

「エイブは、仕事を任された筈なのに、任してくれた相手に心配されてばかりいるのは嬉しいかい？」

おばあちゃんの指摘に、ハツとした。

そうだ、僕は皆なら大丈夫だと思ったからこそ任せた筈だ。

「……嬉しくない」

「分かったようだね。気張りどころだ。頑張るんだよ」
「はい」

久しぶりに僕の頭を撫でてくれるおばあちゃんの手には、青年の家から会いに来てくれる程、僕は心配掛けてしまったんだと気が付いた。

「ありがとう。おばあちゃん」

もうしばらく頭を撫で続けて欲しくて、僕はおばあちゃんに頭を下げた。

出航。(後書き)

伝令

「伯父さん、お久しぶりです」

「元気そうだな」

「はい」

久しぶりに会った伯父に会釈し、集まってくれた皆にも頭を下げる。

「北からの伝言を持ってきました」

場の緊張が一気に高まった。

今回の話にどれだけ皆の期待が大きいか、ビシビシ伝わってくる。

「物資の荷造りはもうすぐ終わり、間もなく船を出せるそうです」

伯父は肩を叩いてくるし、周りも皆、腕を叩き合い、握手し、涙を浮かべる者までいる。

だが、声は出さない。

北の州との違いをつくづく感じる。

こんな時、北の州なら口笛指笛お囃子万歳三唱のお祭り騒ぎだ。

北の州長が若いから？ いやここがそれだけ抑圧されているんだ

ろっ。

あ、伝言思い出した。

「伯父さん、もう1つ北の州長から伝言を預かってました」
「何だ？」

一斉に皆がこちらを見た。
ちよつと恥ずかしいんだが……。

「落ち着いたら、こちらに技術取得の希望者を送りたいそうです。
お願いしたいと言っておられました」

「裏別名、嫁探しの旅か」
「久しぶりに聞いたなあ」

懐かしそうに、皆がざわざわ語り出した。

「嫁探しでなら、一番に北の州長が来そうですね」
「そうなのか？」

「ええ。北の州で一番嫁取り出来なそうなのが、州長ですから」
本人を思い出して、つい吹き出しそうになってしまう。

もっと聞きたそうな皆に、北の州長とその幼馴染達のエピソードを、その夜知ってる限り延々と語ってしまった。

州長には悪いけど、楽しかったあ。

帰航。

「エイブお兄ちゃん、ただいま〜っ！」

「バナっ！ おかえり〜、上手くいった？」

日常だ、日常を継続するんだと、“輝ける白”が帰ってきた事に気が付いたが、そのまま窓の外に気を取られながら、州長館で仕事を継続していた僕。

そんな僕の前に、バナが飛び込んで来てくれた。

「うんっ！ バナ、頑張ったんだよ。 ……え〜っとな、こんな

感じだった〜」

そう言うとバナは数役こなしながら、エイブに状況説明をし始めた……。

***BGM・スパイ音楽っぽいの

静かな夜の海。

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、“輝ける白”の上から陸を見ていたバナは、陸からのランプの光に気付き、フィシャリ姉に目配せした。

「ええ。合図ね」

領いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り払ったりをゆつくりと何度か繰り返した。

すると向こうも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だ」

北西の州担当のガンディ兄も、バナに領いて来た。バナが周りを見回すと、仲間は皆領いてくる。

「よし、明日は“輝ける白”を港に着けよう。くれぐれも気をつけるよ、バナ」

「ええ、分かっているわ」

自分の役目は、今夜はゆつくり休み、明日の入港に備える事。後の事は夜勤の者に任せ、バナは寢床に入った。

翌朝、“輝ける白”はゆつくりとバナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「来てくれてありがとう」

「約束は守りますよ」

ガンディ兄が、相手の人としっかり握手を交わしている。

しかし顔を合わせても、すぐに物資は渡さない。
ランプの合図以外にも、取引相手の確認手順があるのだ……バナ
は問い掛ける。

「例のものは？」

「……ここに」

ガンディ兄と握手していた人が、木彫りの首飾りを出して来た。

「貸してくれっ」

ダニヤル兄が引ったくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一
つを取り出し型を合わせる。

それはぴつたりと綺麗に嵌った。

「確かに……。合言葉を」

バナが言った途端、相手は狼狽する。

「そ、そんなの決めていたかつ？」

それを見て、バナはふつと笑った。

「嘘よ。でも、そんなに固くしてて大丈夫なの？ これっきりの
取引じゃないわ、まだまだ先は長いの。気楽にいきましょう、お
互いにね」

「……はあ」

「ではこちらの物資を収めて頂戴」

バナは帆船に積んであった荷を見せた……。

バナの語りがここまで進んだ所で、バナの後から続々入り、一緒に話を聞いていた幼馴染達が吹き出した。

「ぶははははつ。もう我慢出来ねえっつ。そんな言い方してないし！　バナなんか、めちゃくちゃ緊張してたじゃん！」

「も〜〜雰囲気壊さないでよ〜〜っ！　ガンディ兄だって、カチコチだったでしょっ！」

それを聞いてバナは怒っているが、僕も笑う。

「通りで芝居がかってると思ったっ」

「こんな風に報告された方が、エイブお兄ちゃんも楽しいよねっ？」

「うん。何かもうすっかり気分は闇取引!？」

実際、権力を握っている人達にすれば、それ以上の何物でもないのだが……。

「バナ、渡し相手の確認に使った鍋敷きほしいな〜。ホントに綺麗だったんだよ〜」

「うん。あれは綺麗だったわ。私も欲しいなあ」

おや、フィシャリからの褒め言葉が出た。

これは凄い。

「お部屋に飾りたいよねっ」
「いいわねっ」

実際に実物を見れなかった僕は、レプリカを作って貰う事にした。

「ご褒美でダニアルに作ってもらおうといいよ」

「おいっ!?!」

「ご褒美っ!?! やったっっっ」

ダニアルは渋るが、バナはもらっ気満々である。

「でもダニアル兄つてば、そのままでもバッチリ合ってたのに、
州の人が首飾りを出したら、引ったくつてさ。さっそく手直し入
るんだよ」

「あれはちよつと邪魔だったわ〜」

「荷物運びの手伝いも無視だったね〜」

「すみませндеシタ。オワビに2人に鍋敷きを進呈シマス」

「やったあっ」

「悪いわねえダニアル」

「イイエ、ヨロコonde」

弱り切ったダニアルの顔が可笑しくて、つい大爆笑してしまった。

周りの幼馴染達も、ダニアルの肩や背を叩いて大笑いだ。

うん！ 今回の航海は大成功！
僕はホッと一息ついた。

後でそれぞれの州に確認に行った幼馴染によると、詳細はそれぞれ違うが、援助物資は無事に南の州を除く各州で開かれた闇市場で売りに出されたそうだ。

次が楽しみになってきたっ！

帰航。(後書き)

取引

静かな夜の海。

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、バナと皆はもう興奮しまくっていた。

「ある？」

「見えるか？」

「あれっ！ あれ違う?!」

「どこだっ!？」

みんな一斉に駆け寄ってくる中、バナは陸からのランプの光に興奮し、フィシャリ姉に飛びついた。

「ええ。合図ねっ」

頷いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り払ったりを、震える手でゆっくりと何度が繰り返した。

すると向こうも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だっ」

「うおおおおお」

北西の州担当のガンディ兄は、バナと一緒に周りの仲間に抱き着かれて押し倒された。

「よし、明日は“輝ける白”を港に着けるぞっ」

「うおおおおお」

船上はもうお祭り騒ぎだ。

皆で飛んだり跳ねたり、海に飛び込んだりしまくったっ！

「野郎どもっ！ 夜勤の者以外全員就寝っ！」

「はいつ姐御っ」

フィシャリの号令の元、バナは寢床に入った。

翌朝、“輝ける白”はあっちこっちにヨロヨロしたが、バナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「来てくれてありがとう」

「約束は守りますよ」

ガンディ兄が、相手の人としっかり握手を交わしている。

その後ろの船の上から万歳三唱を行い、口笛、指笛出来るお囃子を飛ばしまくった。

そんな中、目の色変えてたのがダニヤル兄だ。

「例のものは？」

「……ここに」

ガーンデイ兄と握手していた人が木彫りの首飾りを出して来た。

「貸してくれっ」

ダニヤル兄が引つたくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一つを取り出し型を合わせ、ぴったりと綺麗に嵌ったのに、さっそく座り込んで手直ししてる……。

そんなダニヤル兄に、北西の州の人は引いていたが、浮かれたバナはついふざけて、

「合言葉は？」

「そ、そんなの決めていたかつ？」

「山といえば？」

「川だっ！」

何だか可笑しくて笑っちゃった。

皆もつられて大笑いしてくれた。

「ではこちらの物資を渡すわね」

フィシャリ姉の号令に、慌てて荷物運びに皆で走った……。

闇市場

8州それぞれの契約を担当した幼馴染達が、航海からしばらく経ったある日言いだした。

「エイブ、オレ達ちよつと出掛けてくる」

「え、どこへ？」

「契約先の様子を見る」

「え〜?!」

さも当然といった調子のガーンディに僕は驚く。

「お前、気にならないのかよ」

「そりゃあなるけど」

「オレは気になってしょうがないから、ちよつと様子を見に行ってくるわ」

「ぼくも」

ガーンディが言い出したからというわけではないだろう、エッドもそれに倣った。

「でもさあ。冬が近いんだよ？」

隣の北西の州ならともかく、西南や東南の州だと遠すぎる気がするけどなあ。

「おう！ だから雪が降る前に急いで行って帰ってくるぞ」
「う~~~~ん」

「すぐに戻るって」
「……分かった」

渋りつつも、結局折れた。

実は僕も気になってるし、担当のガンディやエッドにしたら尚更だろうから、しょうがないよな。

「これ、持ってってくれ」
引き出しの中からお金を出し、それぞれに配る。

「何だこれ？」
「お金さ。これで旅が楽になるように、出先の州でそれぞれ馬とか銃とか斧とか買ってくれないか？」

「買っ？」
疑問顔をしている2人に僕は頷く。

「うん。北の州には皆に使ってもらえるような馬や銃の予備はないけど、それぞれの州なら1つずつぐらいあるんじゃないかと思っつてね」

「なるほど」

どつちやら、これだけの言葉で理解してもらえたようだ。
僕はさらに続ける。

「それで、もし譲ってもらえる余力がありそうだったら、教えてくれないか？」

「ああ、北の州用に頼むのか」

「うん。僕等には新しく作る技術が残ってないから、そろそろ道具がね……」

舟関係も親方が生き残っていなかったら、海へ出るのはもっと遅くなっていたに違いない。

他州に少しでも多く、色々な技術を継いだ人々が、生き残ってくれていればいいのだが……。

「そうだな」

「気をつけとく」

「うん、頼む。気を付けて行ってきてくれ」

「「おう」

まあ、悲観的になる事はないよな。

僕らはお互いに笑顔を浮かべた。

無事に冬が来る前に、皆は北の州にお土産付きで帰ってきた。

「馬なら少し融通が利くって言うてくれたよ」

「こっちは刃物だな」

「鍋釜なら何とかするって」

頼んでみて正解だった。

少しだろつが何だろつが、心強い返事に嬉しくなる。

「助かる。北の州の皆に、新しい道具が手に入りそうだって伝えてくれ」

「おっつ」「おっつ」

気が付いたら、幼馴染達はそれぞれの契約を担当した州をちよくちよく訪れていた。

双方で連絡を取り合い、物資の輸送回数は少しずつ回を重ねて行った。

担当者の幼馴染達は8州の陸から、バナヤフィシヤリは海から見た様子を逐一報告してくれるので、各州が変わっていく様子を僕は知る事が出来た。

その日も帰って来るなり、ガンディが言って来る。

「え〜、オレ担当の北西の州では……っ！」

「うんっ？」

しかも嬉しい知らせらしい、僕は期待を込めて頷いた。

「なんとっ!」

「うんうんっ」

「なんとなんと、なななんと……っ」

「……もったいぶらずに早く言えよ〜っ」

焦れて急かした僕に、ガーデンディが胸を逸らせて発表する。

「闇市場の売れ行きが順調すぎて、次の物資を予約したいって言うて来た〜っ!」

「おおおっ!」

するとガーデンディに続けとばかり、エツドも声を上げる。

「ぼく担当の南西の州も同じくっ!」

「うお〜っ! 凄いなっ!」

どうやら闇市場は予想以上の盛況ぶりらしい。

するとフィシャリが嬉しそうに口を開いた。

「何だか、会うと分かるのよ。他州の人達の表情が変わって来てるなって」

「変わったって、どんな風に?」

僕はわくわくと続きを促す。

「一言でいうと、ノビノビしだした……かな」

「あ〜そうかもっ」

「そうだよなあ」

「闇市場を覗きに行くと、声が前に比べて明るくなったなって、おれも思った」

フィシャリの意見にみんなが次々に同感し、ダニヤルもうんうんと頷く。

「へ〜。やっぱり物があるから?」

「もちろん、それもあるんだろうけど……」

「うん、やっぱあれだなあ。やばくなったら北の州へ行けばいいんだって、気持ちの余裕が生まれたからかなあ」

「それいいな。今度行ったら、いざとなったら北の州へ。って言うところ」

「熱烈大歓迎ですって?」

「うんっ」

皆と一斉にドツと笑ってしまった。

「なるほどな〜」

その説明に僕は納得する。

僕にとってのおばあちゃん存在が、他の州にすると北の州になってるって事か。

と、すると北の州は変わらずに在り続け、期待に応え続けなきゃいけない……。

もちろんこれから連絡は取り続けるつもりだけど、北の州が出せる援助可能な食糧には限りがある。

とはいえ何も運ばずに、せっかく生まれた気持ちの余裕が萎んでしまっっては勿体無い。

口だけではなくて、物資という目に見える形もあった方が誰だつて安心出来る。

「エイブ。食糧だけじゃなくて、お互いに特産品の売り買いもしたらどうだい？」

「何かないかな？」　と思ひ悩んでいた僕に、おばあちゃんが提案してきた。

「特産品？」

「昔はそれぞれ得意としている物があつたんだよ。　北の州なら海産物や運輸のようにね」

「刃物なら。鍋釜なら。　って他州の人が言ってくれたみたいにか？」

「そうだよ。　くじ引き制度がなくなったとはいえ、ダニヤルが作つてる木彫りみたいに、好きな人はずっと続けてると思うよ。　売れるとなれば、ますます特産品の復活が進むんじゃないかね」

さすが北の賢者。

やっぱり目の付け所が違つよなあ。

「落ち着いたら技術取得の希望者を送りたいとは言つてあるけど、廃れてちゃ教えて貰う事も出来なくて困るよな」

「色々教えて貰いたい物が北の州は一杯あるからな」
「だよな」

でも特産品として何があったかなあ。
な〜んて考えてたら、皆からぼんぼんアレはコレはと品物候補が
上がる。

「そういえば昔はもっといい茶碗があったよな。箸で叩くと、いい
音がしてさっ」

「あ〜あったあった。あれって、どこの州の特産だったんだろなあ
」？

「そんなのより、ふんわり優しい肌触りの布よっ」

「いいよね〜あれ。ほし〜いっ」

「あと何にしても色がさ〜」
等々。

しばらくその話題で盛り上がり、皆それぞれ好きな物を頭に描い
てほわ〜んとする。

「次に出会った時に、相談してもらってもOK？」

「賛成〜了解〜」

それで今回の座談会は終了かなと思ったのだが、エッドが気にな
る事を言い出した。

「どうも小耳に挟んだんだけど、闇市場が盛況なせいで、権力を
握ってる連中が一人占めしてた方の物資が売れなくなっているらし
い」

「当たり前と言えは当たり前だけど……怒るね、それは」

「だろなあ」

「闇市場お取り潰しとか？」

「表立ってはまだ何も無いけど、これから要注意かな……と」

「うん」

取引相手に北の州からも注意を促し、連絡を密にするという事で、とりあえずお開きとなった。

闇市場 (後書き)

闇市場

トントントン……カチャッ

「入って」

「失礼します」

初めての客だ。

きちんと説明せねば。

「あの……こちらでコメが手に入ると聞きました」

「ああ、ある。ただし絶対信用できる者以外には、口外しないと約束してほしい」

「なぜ？」

「ここにある物資は北の州に逃げ込んだ甥っ子が、州長に無理言って分けて貰った物だ」

「北の州?! 無事なのですか?!」

驚くのも無理はない。

だがもっと驚くべき話がある。

「何とかギリギリ生き残ったらしい。2代の州長のお陰でな」
「2代」

「ああ。今の州長は2代目だそうだ。先代は過労で亡くなったらしい」
「……」

しかも、親子で2代なのだという。

親子なら尚更、州を我が物顔にしてもおかしくないのに、自州の現状を思うと、どうして北の州はそうならなかったのかが不思議で仕方ない。

「北の州もギリギリなんだ。だから無償で分ける訳にはいかない。そこでだ。何か品物になる物を代わりに預かって、それを売りに出させてもらおう。」

いくらで売るかは其方次第。その代金分だけ食糧を分けさせて貰っている」

「今お支払しなくてもいいのですか？」

「支払って貰えるなら助かるが……無理だろう」

「はい……」

「何をいくらで預かったか、きちんと記録を残させてもらおう。いつかゆとりが出来た時に買い戻しに来てくれればいい」

「はい……」

「泣くな……。初めて助けの手が差し伸べられたんだ。喜んでくれ」
「はい……」

連絡手段。

「どう？ 元気かな？」

ここ最近の僕は、青年の家へちよくちよく様子を見に行く。

「うん！ 大丈夫！」

「みんな元気だよ！ 任せてっ！」

主に世話をしてくれているヘイズルとアイリンが返事をしてくれる。

良かった。

取引先の8州から預かった大事な伝書鳥だ。

亡くしてしまったら、緊急連絡用として伝書鳥を僕等に預けてくれた他州の人達に申し訳が立たない。

でも、最初は大騒ぎだった。

「お兄ちゃんっ！ コレ何？」

輸送の船旅から帰ってきたバナが州長館に飛び込んできて、僕に鳥籠を差し出した。

「……鳥？」

「緊急連絡がある時に使ってくれて渡されたっ！」

「緊急連絡？」

いや、確かに他の州長達の動きがおかしいって聞いたから、取引場所も何か所か候補を挙げてもらい、それにともないその日の取引場所も、ランプの合図で指定出来るように、何種類か用意してほしいと頼みはした。

後は譲ってもらった馬を使って、連絡を取り合えば大丈夫だと思っただけだが、緊急連絡用の鳥？

「これを与えてくれって渡されたんだけど、もう残り少ないの。エイブお兄ちゃんどうしよう？」

「……雑穀？」

バナが見せてくれた餌には、分かる範囲でだが何種類かの草や木の実らしき物が混ざっていた。

「とりあえず、おばあちゃんだっ！ 持っていくぞっ！」

「うん！ エイブお兄ちゃんっ！」

分からない事は、北の賢者っ！

バナと僕は鳥籠を持ち、慌てて青年の家に向かった。

「伝書鳥だねえ。うん。元気そうだ」

「「伝書鳥？」」

きょとんとした僕らにおばあちゃんは説明してくれる。

「伝書を託して放つと、相手に伝書鳥が届けてくれるのさ。もっとも一方通行が多いね」

「一方通行？」

「放すところの子等が巣だと思つ場所に帰るんだよ。バナ、この子はどこで預かつたんだい？」

「北東の州で」

「うん。じゃあ北東の州に帰るだろう。北東の州に伝言がある時、伝書鳥に託して放てば届けてくれるさ」

「へえ」

さすが北の賢者。

おばあちゃんが居なかつたら、せつかく預けてくれた伝書鳥も、有効活用出来なくて宝の持ち腐れになる所だった。

「おばあちゃん、この子はどうすればいい？」

「逃げないようにして、大きな鳥籠の中で飼うんだね。病の前は北の州でも飼つてたし、どこかに飼い方の本があるはずさ」

「分かつたっ」

バナが頷くと、横から2つの声が割つて入る。

「バナ、手伝うよ」

「ヘイズル、アイリン、助かるっ。皆も本探し手伝つてっ」
「うんっ」

こうして青年の家に残されていた伝書鳥の飼育法の、本頼りな試行錯誤の飼育が始まった。

伝書鳥について覚えていそうな人達に聞いてみると、流行病が猛威を振るっている間に、食糧にされたり逃げられたりしたそうだが、詳しい飼育の仕方が分かる者が亡くなっていった事もあり、この10年程、北の州で伝書鳥は姿を消した。

「野生の伝書鳥を捕まえて、伝書を運ぶように出来るかな？」

「おお。いいな。やってみようぜ」

そうと決まれば準備だっ！

ジェイカブと一緒に青年の家の前で餌を撒き、その上に籠を置き棒で支え、棒に紐を付け、その紐の先を持って青年の家の陰に隠れた。

「来ないね」

「来ないな」

「エイブお兄ちゃん……」

「ジェイカブ兄……」

「何だい？」

後ろからヘイズルとアイリンが声を掛けてきた。

「そこはめったに伝書鳥来ないよ」

「捕まえるなら、林の手前とか良いと思うよ」

しかも2人は手に何羽かの伝書鳥を入れた鳥籠を手に行っている。

「お前等行動早いなあ」

「もう捕まえて来たんだ」

ジェイカブと僕がすっかり感心して言うと、ヘイズルとアイリンはだっつねと捕まえたわけを教えてくれた。

「一羽だけじゃ、さみしいし」

「野生の伝書鳥を捕まえて、卵を産んでくれたら増えるかなって思
つて」

その答えに、当然伝書鳥に関して新たな疑問が沸く。

「増やせるか？」

「ジェイカブ兄、聞いてきてよ」

「北東の州の人にか？」

「うんっ」

「分かった。今度聞いてきてやる」

「やったあ！」

「ジェイカブ兄、よろしくね！」

楽しそうに、ヘイズルとアイリンは青年の家に戻っていった。

「大変だねえ。頑張ってたっ」

僕はジェイカブの肩を叩く。

「伝書鳩は使えそうなんだろ。ちゃんと聞いてくるぞ。任せろ」

ジェイカブも僕の肩を叩き去っていく。

確かに僕は伝書鳩を使えそうだと思ってたけど、何で皆分かるんだろう……。

不思議だ……。

最初に伝書鳩を預けてくれた北東の州の人に、担当のジェイカブが色々聞いて来たり、取引先すべての州から伝書鳩を預かってきたり預けたりして、取引のある8州との緊急連絡用として、伝書鳩を使うようになった。

まだ伝書に使える鳥の数が少ないので、あくまで緊急だけで使うに越した事はなかったのだが、少し前から懸念していた通り、州長・またはその周りの腰巾着達による、闇市場の摘発が行われ始めてしまったらしい。

「案の定来ちゃったか」

僕は唸ったが、今はまだそれほど悪い事態にはなっていないらしい。

「闇市場はもう生活していく上で欠かせない。だから摘発してくる連中を快く思っていないけど仕方なくお勤めしてる人が、こっそり日時を教えてくれるって」

「あと、船に対しての摘発日も知らせる……って書いてあるよ」

「うん。ヘイズル、アイリン、ありがとう。また着たら教えてくれるかな？」

「分かった」

「エイブお兄ちゃん頑張ってるね」

「おうっ」

「この子達は、北西の州の子達だよ」

「うん。今度ガンディ兄に、預けないとね」

遠くから知らせを届けてくれた伝書鳥の、世話をしながらしゃべるヘイズルとアイリンの声を背にして、州長館へ僕は戻った。

伝書鳥に手紙を付けて送って来てくれた誰かが、気遣い無用を伝えてくれる。

それにしても、すでに内通者を作っているとは思わなかった。

ちゃんと摘発対策を考えてくれていたんだなあ。

「そか。なら北の州としては傍観？」

「とりあえず、こっちが出来る事は今のところなし。後はバナ達により一層気を付けるように伝えるだけだな」

「そうだな」

あと念の為、摘発日には他州での接触禁止の徹底かな。

北の州にえらく恩を感じてくれているらしい取引先の州の人は、
僕達を危ない目に合わせないよう、最大限に努力してくれている。
その思いに応えないといけないと、僕は気を引き締めた。

連絡手段。(後書き)

夜勤

今日は私が夜勤の日。

しっかり陸の合図を見逃さないよう、ランプの明かりをじっくり探す。

「フィシャリ、これが新しいランプの合図だから、覚えて皆に伝えてくれ」

前回航海から帰った時に、エイブから渡されたランプの暗号。

3つの部分から構成されている。

まず最初は受取そのものが出来るか。

次に、どこの港で受取出来るか。

そして最後に、安全な航海が出来るか。

「今回は候補に挙がっている港をちゃんと見ておかなきゃね」

静かに一人心地る。

昔私達が恐れたのは食事抜きのパ。

それさえも恐ろしくて小さくなっていた。

エイブが居なければ、守ってくれる者が居ない私達の生活は耐え難い物になっていたに違いないとよく思う。

そんなエイブは、私達だけでなく他州の人達まで助けようと動き出した。

他州の人達は、そんなエイブに恩を感じてくれるのか、私達が危険な目に合う事ないよう、正確な情報を集め伝えてくれる。

情報を流している事がバレた時、彼等の場合は、自分達の命が危ないのに……。

「私に出来る事は、物資をきっちり届ける事」

しっかりと心に刻んでおかなければならない。

彼等の思いに応えるには、それしかないのだから。

摘発。

それから数カ月後。

闇市場の主催者が見つからない事に、業を煮やした権力を握る連中が、少人数で抜き打ちの摘発を行ったらしい。

「エイブお兄ちゃん大変っ」

「何人かが捕まってしまったっ」

ヘイズルとアイリンが伝書鳥を手に州長館に飛び込んできた。

「なッ！　すぐに助けに行かなくちゃッ！」

そこまで聞いた僕は訴えたのだが、伝書にはまだ続きがあった。

「落ち着け、エイブ。脱獄は向こうの州がやってくれるから、こっちは逃げてきた人を受け入れるだけでいいみたいだぞ」

「え、そうなのか……？」

いざとなったら&熱烈大歓迎と言っているし、それは構わないのだが、取引相手が危ない目に合っているのに、自分だけこうしてのうのうとしているなんて……。

「じゃあ、州境まで迎えに行くよ！　着の身着のまま逃げて来てるだろうし、もしかしたら北の州の州都への道もよく分かってないかも……っ」

「ばかっ」

「エイブは動くなつ。俺達が行くつ」
「うんうん」

しかし打てば響くぐらいの勢いで、皆から駄目出しを食らった。
なぜ……っ？

「大丈夫だ。こんな事もあるつかと、ちゃんと道は整備してある」
「馬車の準備もばっちりだ。後は迎えに行くだけだ」

「北西の州かららしいから、オレが行くよ」
「うん。頼む」

確かに担当のガンデイなら、何回も陸から北と北西の州を歩き
来してて、州境の地理も詳しい。
それに北西の州では一番顔が知られてるし、たぶん面識もあつ
て、逃げてくる人にしたら安心だろうけど。

非常に僕は不服だ。
「僕はまたお留守番ですか……」

「その通り」
「……」

僕はいつになったら、州都から出掛けられるんだろう……。
もしかして州長でいる間は、ずっと州都に缶詰？
ややや、諦めないぞ〜ッ！

が、今は緊急事態だし、今回はおとなしく引き下がるとしよう。

「分かった。じゃあ任せる。気を付けて行ってきてくれ」

「おう」

ガンディは早速旅支度をするのだから、部屋から出て行った。

「じゃあおれも行くな」

ダニヤルも僕に声を掛けてきた。

どうやら一緒に行くらしい。

まあダニヤルが僕等の中で一番馬車に慣れてるし適任かなあ。

「危なかったら無理せず戻って来てくれ」

「おう」

ガンディの後を追うダニヤルの背を見つめながら、何事も起こらない事を願った。

「すみません、本当にお世話になる事になってしまつて……」

北西の州から逃げてきた人達は恐縮しきっていた。

僕は首を横に振った。

「僕の方こそ、ちっとも動かなくてすみません。お疲れでしょう、

今日は州長館でゆっくり休んで下さい」

「ご飯とお風呂の準備はばっちり。

後は明日隣村に連れて行って、落ち着いて貰うだけだ。

「無事に皆さんが北の州に着いているって、知らせておきますね。」

何か一筆添えますか？」

ヘイズルとアイリンが連れて来てくれた、北西の州の伝書鳥に預ける伝書を書きながら聞いてみた。

少し考えた末に、答えが返される。

「逃げて来たばかりの癖になんだ、と思われるでしょうが……。ほとぼりが冷めたら自州に帰りたいと」

うーん……残念。

残ってくれて僕等が失った技術を色々教えて貰えれば、本当に助かるんだけどなあ。

「そうですか、それは残念です。ご自分で書かれますか？」

「いえ、お願いします」

「はい。分かりました」

僕は、皆無事に北の州に着いた事。

ほとぼりが冷めたら戻りたいと言う旨を伝え、受け入れ準備をお願いしたいと記載した。

「こんな書き方でいいでしょうか？　でも故郷が一番っていう気持ちは分かります」

しかもこの人達は覚悟の末ではなく、突然に逃げざるを得なくなった状態で北の州に来たのだし、尚更だろう。

同感を表した僕に、その人は意外な事を言い出した。

「もちろんそうですが、ガンディ君の話や、特産品の売り買いをしているうちに、自州でもくじ引きを復活させたいと思うようになりまして」

「うっわあっ！ いい事ですっつ」

くじ引き万歳！！

思わず僕が叫ぶと、一斉にその場にいた幼馴染が吹き出した。

「見ろよ、このエイブの顔っ」

「ホント嬉しそうねえ」

「悪かったなあ、いいだろ別にっ」

他州の人達の前で恥ずかしかったが、僕は頬が緩むのを止められなかった。

どう考えても今クワサント島がおかしいのは、くじ引きが実施されないからだ。

流行病が流行している時ならともかく、落ち着いている今くじ引きが実施されていれば、他州へ逃げなきゃいけない人が出る訳がない。

「北の州はこうなんだ、と自分自身で周囲に訴えに帰りたいんです」「はい？」

北の州を目標にしてどうするんだ？

ろくな技術は残ってないし、人もいない。
いつもギリギリの生活なんだが？

そんな僕を後目に、幼馴染達は大喜びしている。

「いやあ。良く分かってる〜」

「うん。どんどん見て行って。案内するわっ」

「一緒にエイブで遊ぼうぜ〜」

「……おい」

目の前の現状に全然ついていけない僕で遊ぶって、何だそれっ！

「まあまあまあ」

「じゃあ、後は任せてエイブ」

「部屋はこつちだよ。落ち着いたらご飯にしない？」

「お〜いつ」

完璧に僕を無視して、皆が部屋から出て行く……。

まあ逃げてきた人達を幼馴染達は気に入ったみたいだし、皆が一緒なら北の州での受け入れも早いだろう。

何とか騒ぎにならずに落ち着きそうであつたなあ。

その頃から、全島くじ引き復活の動きが広がっていったらしい。らしい、というのはつまり僕の場合又聞きばかりだからだ……ちくしょー！

摘発。(後書き)

脱走

「身代わりを袋に入れる」

「おう。ついでに手紙を入れとくか？」

「うん、これを……」

豚の死体に、手足らしいのを付けた物が入っている死体袋の中へと、手紙を入れる。

この死体袋はそのまま家族の元に届けられるはずだ。自分達が無事であると、家族に分かるといいが……。

「大丈夫だ。ちゃんと家に届けられる」

「お前達の家族は、皆で守る」

「頼みます……」

「こつちだ」

「はい」

見て見ぬふりをしてくれる治安部隊の人達に深く頭を下げ、指示される方向に音を立てないよう移動する。

自分達を助ける為に先導する彼等が、どれだけ危険な橋を渡っているのか、ちよつと考えれば分かる事だ。

それに、州長館の情報を流してくれる彼等まで州長達に捕まってしまうと、危険を承知しながら物資を届けてくれる北の州への義理

が果たせない。

ここで絶対に捕まる訳にはいかない。

耳を澄まし、息を殺しながら音が出ないように先に進んだ。

「この辺だと思っただが」

「誰も居ないって事はもしかして」

意味不明な事を先導してくれる二人が言い合っている。

そんな村の背にある森まで来た時、馬の足踏みの音がした。

「馬？」

こんな夜中の森の中に、馬なんている訳がない。

訳が分からなくて、ここまで連れて来てくれた仲間の顔を見比べる。

「来てくれたんだな……良かった」

「行ってくれ。北の州長に感謝を伝えてくれ」

自分達の背中を押してから、治安部隊の仲間が急いで戻っていった。

訝しみながら馬の足踏みが聞こえた方向に、藪を掻き分けて先に進んだ。

「……ガーデンディ君」

「オレは迎えます。歓迎しますよ。北の州まで馬車でいきます」

自分の緊張は、一気に抜けた。

助かったんだ……。

やせぐれて。

「今日も今日とてお留守番」

かなりやさぐれ状態で、僕は自虐的に歌なんかを口ずさむ。

「うわっ、エイブが壊れてる……っ?」

「おいおい、エイブ?」

そこへちょうど帰って来た幼馴染達に、思いつきり引かれた。だが、気にしない。

「僕も旅に出たい。うーらーめーしーやー」

何だか我ながらくじ引きが復活してから、僕の精神年齢は下がっていく一方な気がする……。

北の州はくじ引きが復活してからも、問題なく復興が進んでいる。更に全島でくじ引きが復活すれば、今起こっている問題のほとんどは解消されるはずなので、それは目出度いし、嬉しいに決まっている。

だが、僕自身としては北の州のくじ引き復活が出来たら州長からお役御免で、一州民として暮らせるのだと思っていたのだ。

父はどうだったのだろうか?

自州の復興後はどうすると考えていたのだろうか?

今、北の州は平和だ。

他州の事は考えず、北の州の復興だけなら達成したと言える。

まあ、日常に使う道具類でさえ他州頼りになっている現状は、技術的にも人材的にも色々と問題ではあるが……。

でも、普通に暮らしていただければ何とかなるのだ、北の州だけなら。

平和な北の州だけなら、僕が州長じゃなくてももう全然問題ない。

実際僕が他州の事にまで手を伸ばしたから、他州から北の州長である僕が睨まれ始め、僕は州長館からろくに出れなくなっているのである。

自由に動き回りたい僕にとっては、踏んだり蹴ったりな現状である。

もう他州なんて考えず、北の州だけで好きなようにやっていけば、僕も幼馴染達みたいに、自由に動けまわれる様になれるんじゃないか〜なんて、薄情過ぎる考えまで浮かんでしまった。

「エイブ、しっかりしろ！ 大丈夫か？」

どうやら、頭の中で考えるだけでなく、口からも出ちゃっていたらしい。

「大丈夫じゃない。だから、州長を代わってくれ。僕も実働部隊に入りたい〜」

「それはパス！」
「……………」

そんなキツパリハツキリ。
よよよと崩れる僕。

「何で〜何でなんだ〜。何で僕だけここで缶詰〜」

ぶつぶつ気持ち悪く独り言を呟く僕を気遣いながらも、幼馴染達
はいつも通り報告を入れて来る。

だがまあ、幼馴染達の様子からするに、今回は大きな問題はな
かったのだろう。

まあ、何回かの抜き打ち摘発があったり、誰かが無事だったり捕
まったり、何とか脱走させて北の州に匿ったりが起こったそうだが
……………。
取引も順調そうで何より何より……………。

「それでな、エイブ。……………おい、聞してる？」
「……………うん、それで？」

一応聞いてはいる、これは性格だから仕方ない。

「帰りに意外な人物と会ったよ」
「意外？」

北の州へ一緒に帰って来なかったという事は、どこかの州から逃
げてきた人ではないのだろう。

僕は少し、エツドの言葉に意識を向けた。

「お、ちょっと目の色が戻ったね。……で、南の州の青年の家の代表に会ったんだ」

「南の州の青年の家の代表？」

僕はおうむ返す。

南の州といえば島都だ。

相変わらず島都とは商品取引はない。

南の州は他の8州より逃げて来る人が少なく、内部の情報もあまり漏れてこない。

北の州と同様に、流行病により壊滅的な被害を受けたのは分かっているが……。

「そう、しかも山道で」

「山道だって？」

「もしかして待ち伏せされていたのか？」

「怪我はない？ 大丈夫？」

「大丈夫。意外と常識的な人だったよ。で、これ手土産兼見本だつて」

ドサドサツと机の上に置いてくる。

「ちよつとっつ！ もしかしてチーズっ?!」

「何だつてっつ?!」

幼馴染達が一斉に机の物資に目の色を変えた。

「はちみつまであるっ！」

「うはっ。ちよっと食べてもいいかなっ！」

南の州から来た手土産に夢中で、碌に話を聞いてない幼馴染達を後目に、エツドは爆弾発言を続けた。

「島都は山の麓にあつて、牧畜が盛んな所なんだつて。でもコメはあまり取れないらしい。乳製品を売りに出してコメを手に入れたいから、取引してくれって言つて来たよ」

「どんな人だつた？」

青年の家の代表となれば、僕等よりちよっと年下だが、大体同じぐらいの年代だ。

何となく似通つた所があるかもと、興味が沸いてエツドに聞いてみたのだが、よく考えてみれば、南の州から北の州に逃げて来た人も少数ながら存在している。

その青年の家の代表とやらも、権力を握っている側から睨まれているのかも知れない。

でも、山道で会つたつて事は自由に歩けてるつて事だよな。州都に缶詰の僕とは違うよな。はあ。

「またエイブが遠い目に！ 戻つて来いいいい！」

「……あ。ああ、うん」

「声に覇気がないぞおおお！」

幼馴染は何とか僕に喝を入れようとして来るが、うん。

机に積まれたチーズを焦点の合わない眼で眺めている僕に、ついに諦めたらしい。

「今日のエイブはマジで駄目そうだから簡単に言っと、島都でも闇市場を開きたいらしい。取引先として考えて欲しいって頼まれた」

「南の州は島都だから、下手に手を出すのはまずいし、州の人の生活は他州ほど切羽詰まってないって聞いてたけどなあ」

「どうも各州の闇市場を裏から支えてるのが、北の州だって知れ渡ったみたいだなあ」

「あ~~~~」

まあ、バレるよなあ。

自由に州越え出来る州など、北の州以外どこにもないのだから。

まあ闇市場に流れる物資の名目は、北の州に逃げてきた人達が故郷に送っている援助物資であって、北の州は運搬を頼まれただけという事にしてあるけど。

南の州と取引するなら、援助物資って名目が使えないから、真正銘な商取引にせざるを得なくなるよなあ。

「ん〜。各州で権力を握っている連中が、北の州に文句を言って来るのも時間の問題って事か？　何かもう面倒だな〜」

「おい、エイブ。対策を練らないと……って、言わないのか？」
「こりゃ、重症だな……」

無気力に椅子を後ろに倒し、空を見上げて面倒臭がる僕を放って、
幼馴染達はヒソヒソとやり出した。

「お手上げだあ」

どう考えても援助物資の名目が使えない南の州に突っ込まれない
取引方法が浮かばない。

ガンガン皆で相談し、僕にいい案を捻り出してくれたまえ。

やさぐれて。(後書き)

島都

俺は、本当に島長を尊敬していた。

流行病に混乱する島都を纏め、民を守り、生き残る為に力の限りを尽くした島長を。

島長として忙しいにも関わらず、身内を残らず失った俺が寂しくない様に気を配ってくれた。

青年の家で孤児達と共に生活出来たのも、俺が寂しくない様考えての事だ。

だからこそ、俺の目標は島長だった。

手伝える事は小さいが、青年の家の孤児の兄妹達や仲間達と一緒に、島長が掲げていた食糧増産の為、朝から晩まで駆けずり回った。森に分け入り、持ち主が逃がしたっぽい牛や馬や羊や豚や鳥を引っ掴まえ、島都に連れ帰っては仲間達と飼育し数を増やし、少しずつだが保存加工に回していった。

気が付けば、青年の家の俺達は南の州の食糧確保の中心に、青年の家を卒業した兄妹達は治安確保の中心になっていた。

だが今の島長はダメだ。

流行病は落ち着いて、南の州は平和だ。

青年の家の兄弟達が、憧れを込めて話す元の青年の家に、昔の島のくじ引き制度に今なら戻せるはずだ。

それなのに、

「まだ駄目。まだ早い」

それしか島長は言ってくれない。

どこが駄目なんだ。

いつになったら戻せるんだっ。

悶々と鬱屈した日々を送っていた俺に、遠出から帰って来た仲間達が言いに来た。

「森の様子が変なんだ。消えてたはずの道が整備されてるっ！」

何だと?!

森の道の整備が出来る余力など、島のどの州にもなかったはずだ。

しばらく待っていたが、南の州には森の道は繋がらない。

だが、他州へと日々整備されていく森の道に驚きながら、注意深く仲間達と確認に行き、島都館の兄弟達にも他州の情報を集めてくれるよう頼んだ。

そんな折、怪我をした伝書鳥を弟妹達が拾ってきた。

運んでいた伝書の内容は、ありえないはずの南西の州と北の州の
闇取引……。

「是非とも、仲間に入れてもらおうぞっ！」
「おうっ！」

俺の力では南の州は変えられない。

頼む。

南の州を変える為に、俺達も仲間に入れてくれ……。

密馬車します。

試験的に、次の北西と南西の州の商品取引を帆船ではなく馬車で届け、そのまま島都へ向かうと聞いて、僕はしめた！ と思った。

出発する前に馬車に潜り込んで、そして引き返すのが面倒な位置まで来たら……。

「エイブお兄ちゃんっ！」

思いつきり妄想に耽っていた僕はビクツとした。

「……どどうしたんだ、バナ？」

動揺を隠しきれず、かなり挙動不審だったはずなのだが、それに頓着する事無く、バナが言ってくる。

「今度“輝ける白”はバナなしで行くって。バナお休みだし、でもバナも取引に行きたい。島都へも行くっていうしっ！」

興奮しすぎて分かりにくいのが、つまり馬車に乗りたいうって事かな？

まあ、次の航海は新しい帆船を造船している関係上、バナを抜かした航海を経験させ、皆の操船技術向上を目指してるからなあ。

お留守番が寂しいのは実に良く分かるんだが……。
「もう島都行きのメンバーは決まってるんだよなあ」

ダニヤル・エッド・ガーンディと、緊急連絡用伝書鳥のお世話担

当でヘイズル&アイリン。

しかしバナはそんな事関係ないとばかりに仰った。

「でも、エイブお兄ちゃんは潜り込むんだよねっ？」

「……………っ?!」

「だ・よ・ねっ！」

バナの口調は完全に決めつけている。

何で分かるんだっ?!

そういえば最近バナは、女性陣でも一番の姐御であるフィシヤリと、よく一緒に行動している。

……………そのせいかな?

なんか雰囲気は女性陣に似てきてるようだな。

いや、確かに潜り込むつもりなのだが。

今も妄想真っ只中だったし……………。

「皆には秘密だよ、バナ」

「うん、黙ってる。だから一緒に密航者ならぬ、密馬車しようよっ」

「……………」

それはつまり、拒否したらバラすって事か。

……………まあ、一緒の方が心強いかな?

「1人で帰るのが難しい頃合いまで来たら、2人で同時にワツと出て、驚かそうよっ」

むっ！ そ・それは……。

「1人より2人でする方が楽しそうだなっ！」

「うんっ。やろうっ！」

「おうっ！」

意気投合したところで、僕は心配事を持ち出した。

「バナは旅の間の食料をちよるまかして来れそうかな？」

「自分の分だけなら。2人分は無理かも……」

「僕は無理そうなんだよなあ。でも僕の分くらいなら、みんな分けてくれる……だろう、うん」

迷惑を掛ける皆には申し訳ないが、もう密馬車計画は思い止まらないのだ！

「楽しみだね、バナっ！」

「楽しみだね、エイブお兄ちゃんっ！」

こうしてバナと僕は密馬車仲間となり、黒い笑顔を浮かべあった。

バナとコソコソと密談をして計画を練り、密馬車旅行の荷物を作

っていった。

「これを持っていくのはどうかな？」

「そっぴゃ、船から見た事ないよ」

「おおっ！ やったっ！」

「エイブお兄ちゃん、これはどう？」

「いいねっ！」

実に楽しい。

ついでに事務仕事もポクイツとどっかに放り投げたかったのだが、いつもと違う行動をすれば怪しまれる。

でも後ちよつとで楽しい事が待っていると思えば、ここ最近ちつともペンが進まなかった事務もはかどるし、いつも以上に頑張った。

「うん。やり残しなしっ！ ばっちりっ！」

断じて帰って来てからが怖いとか、性分だからとかじゃないからなっ。

そして決行日がやって来た。

「エイブお兄ちゃん、これをちよつと動かして」

「うん。いい感じだ」

「エイブお兄ちゃんはいけそう？」

「大丈夫。ばつちりだよ」

バナと僕は誰もいないのを見計らって、早朝既に商品を積んである荷台に潜り込んだ。

日が昇ってしばらくしてから、ダニヤル・エッド・ガンディとヘイズル・アイリンがやって来て、めいめい馬車に乗り込んできた。

「じゃあ頼むわよ！」

馬車の中にフィシャリの声が響く。

更に周りに大勢の人が見送りに来ている気配がする。

動かない、動かない……。

ここで見つかったらこれまでの準備がすべて水の泡だ。あとはタイミングを待って、ワツと皆を驚かすのだ。

……と思っていたのに。

「おーい、エイブ。もう出てきたらどうだ？」

「密馬車気分も十分堪能出来ただろ」

「せっかくの馬車旅行だ。楽しまなきゃ損するぞ」

馬車が動き出し州都が見えなくなった辺りで、声を掛けられた。

「どうやら、見送りに僕の姿がないのに、全く話題にも上らなかったのは、僕の密馬車計画が皆にお見通しだった為らしい。」

「まあ、バナにバレて、幼馴染達にバレないはずがないんだが……。」

「……どうしてバレてるんだああああッ！」

「僕は隠れていた場所から、飛び出した。」

「ええっ、バレてたのッ?!」

「違う場所から一緒にバナも飛び出した。」

「だが、飛び出て来たバナの姿に、ヘイズルとアイリンが同時に驚いた。」

「「わあっ、バナもいるっ!」」

「僕には驚かなかった幼馴染3人も、バナに関しては同様だった。」

「バナ、なんで!」

「マジでバナがいる!」

「なぜバナまで〜!」

「おや? 僕と反応が違うぞ?」

「あれ、バナの事はバレてなかった……?」

「当たり前だっ! お前だけだと思ってたよっ!」

「エイブのはあるけど、バナの分の食料はないぞ」

「こっからなら、バナでも歩いて帰……」

「持って来てるから大丈夫だもん！ エイブお兄ちゃんの密馬車仲間に、1人で帰れなんて言わないよねっ？」

幼馴染達は顔を見合わせた。

うん。

ダニヤル達の負けだ。

三人とも同じ表情を浮かべている。

「行ってもいいって、バナ！ 良かったなあ」

「うん、やった〜！」

ハイタッチをして喜ぶ僕等に幼馴染達は苦笑いするが、バナを追い帰そうとはしなかった。

「甘いなあ。オレ達」

「仕方ないかあ」

「うん……」

そんな3人に、ヘイズルとアイリンまで、

「相手がエイブお兄ちゃんだからねえ」

「しょうがないよ」

何故か納得している。

それはそうと、今回の密馬車計画がバレバレだったのは置いといて、僕の旅の食料まで馬車に積んでくれてる事が気になって、幼

馴染達に問い掛けた。

「本当に僕も堂々としていいんだ？」

「最近のエイブはお疲れ気味だったしな」

「これまで頑張ったご褒美だ」

「州の主な面々にも、州長は留守って言うてる」

驚かすのは失敗してしまったが、後の心配が何もいらぬとは…
…素晴らしいっ！

何も憂う事なく、旅の間過ごせそうに僕はお礼を言う。

「ありがとうっ！」

「「おう」「」

「エイブお兄ちゃん、良かったねっ！」

「うんっ！ 楽しもっっ！」

バナと二人喜び合っている僕に、御者席からエッドが言うて来た。

「事務決済は残しとくってさ」

「何でっっ！」

僕は居ないんだから、皆で決めて処理しといてくれよっ！

そうして旅の終わりに待っている書類の山を想像し、天国から地獄に突き落とされた僕は州都から、そして北の州から初めて旅立った。

密馬車します。(後書き)

密談

「ただいま帰りましたっ」

「お帰りっ」

「どうだった？」

「OKっ！ 手に入ったっ！」

「おし。これで通行手形はバッチリだなっ」

「うん。これなら皆、納得してくれるでしょ」

この所様子のおかしいエイブが安全に旅に出れるよう、思いつく限りの手は打てた。

エイブも自分が煮詰まっているのが分かっていくらしく、黙って島都への旅に付いて行こうと何やら準備している。

後は難関だが、親方達を説得するだけだ。

「まあ、しょうがないよなあ」

「ずっつと出たがっていたものねえ」

「そんなに良いもんじゃないと思うんだがなあ」

「一回経験したら分かるさ」

「確かにつ」

皆でドツと笑いあう。

最初の時より、旅をし易くしてはある。

今度の旅が、エイブの気分転換になってくれればそれでいい。

エイブさえいれば、北の州は何とかなる。

これは北の州の皆の総意だ。

いや、今ではクロワサント島の一般島民の総意とも言える。

「どんな事が起こるだろうなあ」

「楽しみねえ」

後はエイブが密馬車してくるのを待つだけだ。

「ちょっとヘイズルとアイリンが気の毒ね」

「バナで慣れてるから大丈夫さ」

「「確かにっ」」

明るい未来の予感がする。

この風をずっと感じて来れたのは、エイブのお陰。

「エイブは今度はどんな波を起こすかしら？」

「きつと全島を巻き込むさ」

海の波頭が白く輝くごとく。

馬車の旅。

やっぱり外の空気は美味しいな。

普段州長館に引き籠ってるわけじゃないけど、やっぱり初めて出た州都の外の空気、旅の空の下の空気は一味違う気がする。

「エイブ、ちょっと御者代わってくれないか？」

「喜んでっつ」

馬はちょこちょこ乗っていたが、馬車を動かすのは初めてだ。

これぞ旅の醍醐味！

急いで僕は御者席に向かった。

「道なりに馬を歩かせればいいから。手綱を絶対離すなよ」

「了解！」

隣で見させてもらったり、触らせてもらった事はあるから何とかなるだろう。

エツドもそう思うから、変わってくれたんだろうし。

いつもダメ出しを出すエツドが出したお許しだ。

こんな機会逃せるかつ。

やっぱり旅に出ると違うよなあ！

「エイブお兄ちゃん、いいなあ」

「バナも来るかい？」

「いや、バナはダメ。ちょっとこっちにおいで」
「エツド兄、何〜?」

僕と入れ違いに荷台へと戻ったエツドが、バナに向かって手招きする。

何だろう?

気になるが、後ろを見続けると馬車が道から逸れてしまう。
前に集中するしかない。

「食糧の分配について、考えないといけないからね。 ちょっとバナの持ってきた食糧を見せて貰えるかい?」

「わかった〜。これだよ〜」
バラバラと物が落ちる音がする。

「……バナ?」

「うわっちゃあ〜」
背後に幼馴染達の怒気を僕は感じた。

「どこが食糧だっ! おやつと遊び道具ばかり持ってきやがってえっ!」

「痛いイタイいたっ!」

どつやらお仕置き真っ最中らしい……。
ごめんバナ、庇い切れない……。

「バナだけじゃないもんっ! エイブお兄ちゃんもそうだもんっ!」

「ばらすなあああ！」

背中に突き刺さる皆からの視線が痛い！

「エイブ、帰ったらお仕置き決定な！」

「うぎゃあああああ！」

ワザとじゃないんだよ〜っ！

食糧を持ってこれない分、旅の間の暇つぶしや、他州の人達との
コミュニケーションツールと思ってさあ〜っ！

はい。

もちろん無視されました。

寂しく御者台で御者ですよ……。

「北西の州と南西の州で、少し分けてもらうしかないな」

「迷惑かける事になるけど、しょうがない」

「おう……」

「……ごめんなさい」

落ち込む幼馴染達を救う為か、ヘイズルとアイリンがアイデアを出してくれた。

「道々何かを収穫していくのは？」

「木の実とかキノコとか山菜とか」

「それ貰ったっ！ 見つけたら教えてくれっ」

「は〜いっ」

もちろん僕も返事した。

旅は実に……予想外だったっ！

まず、道が思ってたより綺麗。

「馬車が通れない所はないようにした」
との報告は確かに受けてたけど、此処まで整備してあるとは思わなかった。

「道の整備は大変だっただろ？」
御者台から道を見ながら、ダニヤルに聞いた。

「たぶんエイブが思ってるより楽だったぞ。元々道があったからかな？ 通りやすいように枝を掃ったら道が蘇った感じだった」

「もつとも、ここはまだ北の州だから、他より手が入ってるよ」
横からエッドも混ざってきた。

「北の州から外れると、道は厳しい？」

「今はそうだね。北の州に近いほど通行量が多いから」
「おれ達を通るたびに手を入れるからな」

「そうか。今回馬車で旅が出来るのは皆のお陰だな。ありがとう」
「恩に着てくれ」

「うん。でも貸しにはしないぞ」
貸しを作ったら、また州長のくじを押し付けられそうで怖い……。

「ちえっ」

あゝ、やっぱりか……。

これからも、貸しを作らない様に頑張らねばと、心に刻む僕だった。

馬車の荷台は結構ガタガタ揺れるんだと知ってはいたが、長時間ガタガタ揺れ続けるのは結構きつい。

でも、馬車内で出来る手遊びやゲームをしたり、歌を歌ったり、（仕事以外の！）話をしたりするのはとっても楽しい。

「この辺でちょっと休憩取ろうよ〜！」

「ちよっと待てっ。さっき取ったばかりだっ」

御者台からガーンデイが言って来たが、ヘイズルとアイリンは、僕の味方！

「靴が落ちた！」

「ガーンデイ兄、馬車止めて〜！」

荷車の後ろから足をぶらぶらさせていた、2人がタイミング良く声を上げる。

「君達も甘いねえ」

2人の頭をエツドが撫でて来た。

「エツド兄程じゃないもん」
「そうだもんっ」

2人は急いで靴を拾いに向かいながら、エツドに言い返している。

しかし、ばれる早かったなあ。

先ほどから、僕が休憩を求めると、「雲だ〜鳥だ〜花だ〜靴だ〜」
と、ヘイズルとアイリンが声を上げ、馬車を止めてくれたからなあ。

ちなみにバナは、おやつが零れた！ と、僕とはまた違うタイミングで馬車を止めてくれていた。

まあ、これはわざとじゃなくて、本当に零してるんだけど……。

地面に凸凹があると、結構大きく揺れるからなあ。

その内、馬車の揺れにも慣れるってガンディは言うけど、僕はまだ慣れない。

腰やらおしりやら、荷台をギュッとつかむ腕やら手やらが、僕に痛みを訴えてくる。

でも、ずっと夢見ていた待望の旅なんだよ。

目的地に行つて帰るだけなんて、つまらな過ぎる。

どうせなら色々見て行きたい。

あ！ 木の実が生ってる。キノコだつ。動物が見えたつ！

陳腐でも、使えるモノは利用せねばっ！

当然それからも馬車を止める口実に、僕は食糧調達を使いまくった。

僕の旅はのどかに続く。

取引物資を受け渡ししつつ、ずっと小さな事できゃあきゃあ騒ぎ、のんきに楽しく馬車を進め、何事もなく州都に帰るのだらうと、この時の僕は思っていた。

馬車の旅。(後書き)

噂話

「北の州長がここに来るって?」

「ホントか?」

「何で?」

「何でも、島都に行くらしいよ」

「島都?!」「」

一斉に皆で口を閉じる合図を行っていた。

「……おかしいっ」

「みんな揃って同じポーズっ」

今度は大声で笑ってしまわないよう、皆で急いで口を塞ぎ合った。

「船で来られるの?」

「それがさ。北の州長なのに、船酔いするから馬車だってっ」

「……ぶっ」

駄目! 駄目だ! 皆でまた口を塞ぎ合う。

「ダメだわ! 詳しい話はまた今度聞かせて!」

「俺もだ!」

今にも吹き出しそうな顔のまま肩を震わせ、皆一斉に散っていった。

それを横目で聞いていた南西の州の親方が、ぼくに聞いてきた。

「エツド君、今の噂は本当かね？」

「……何ではれるんでしょうか？」

「それだけ期待が大きいつて事だろう。いつも州境など無視な君達が、通行手形を手に入れようと動いている事から出た噂らしい」

「……まいったなあ」

ぼくは肩を竦める。

「本当なのかつ！」

「ええ。今回エイブは動くでしょう。ぼく達はその安全を図る為なら、何でもします。通行手形もその為になら手に入れてみせる」

「ここにある。持って行ってくれ」

「……親方っ?!」

「無事に来られる事を祈っている」

「はい。全力を尽くします」

初めて契約を交わした時と同じく、ぼくは親方と固く握手を交わした。

北西の州。

最初の目的地は北西の州だ。

ガーンデイが北西の州境警備の人に、通行手形を見せている。その慣れたやり取りが、何だか様になっていて羨ましい。

ところが州境警備の人の方は、何だかそわそわと荷車を窺ってきた。

何が運ばれて来たかが気になるのだろうか、と思っていると。

「それで、その……噂の北の州長殿も乗っておられるんですか？」

「ああ、乗っている。仲間内以外には他言無用でお願いする」

「はい。それはもちろん！」

噂って、何だ〜っ。

州境警備の人の目に、必要以上の熱が籠っているのが気になるんですけど〜っ！

大騒ぎで問い質すわけにもいかず、僕はエツドをじっと見た。

するとエツドがぼそぼそと小声で答えてくれる。

「エイブは今や全島くじ引き復活に向けての希望の星、旗印的存在なんだよ」

「何それ？」

「他州にとって、自分達を助けてくれる闇市場は北の州あってこそ。その北の州を率い、くじ引きを復活させたエイブは全島の憧れの

象徴なのさ」

「……？」

何ですか、その御大層な？

僕はぽかんと口を開いた。

「僕がやったのって、事務仕事ぐらいですが？　くじ引きは州の皆の合意で復活させたんだし、闇市場だって他州の人と実際に関わって進めたのは、皆だと思っただけど？」

「やっぱエイブに自覚はないかあ」

しょうがないなあってエッドは僕を見て来るけれど、闇市場についてはホント報告を聞くぐらいだし、僕のお陰って絶対おかしいと思っただけどなあ。

そんな僕の思いとは裏腹に、北の州長が来た！　という話は一気に北西の州都に広がったらしい。

闇市用の商品取引が済みさえすれば、後は普通の商人の振りをし、北西の州を通り過ぎるだけ。

僕は一般人。

容姿だって普通だし、大人しくしてればバレないよな。

「ようこそ、北西の州へ」

「……こんばんは」

どうやら、ガーデンディが一緒だった事で、僕の存在がばれたらしい。

北西の州のくじ引き復活運動の代表的な人達から、晩御飯をお呼ばれしてしまった。

何だかこう出迎えに来られちゃうと、旅行というより仕事……？

僕は仕方なくというか、場にに応じてというか、結局どこまで来ても性格上というか、敬語発動。

「はじめまして。こんなに歓迎していただき、ありがとうございます」

「一度、噂の北の州長にお会いしたかった……噂通りお若い」
「こんなのですみません。皆さん、がっかりされたんじゃないでしょうか」

余所行き顔は作ったものの……何だかここまで大人物扱いされちゃうと、これはよっぽど美化された尾鰭が付き捲りに違いないと想像出来た。

ここまで実物と皆の理想像に差がありすぎると、一見の態度だけでも大きく見せようと思わなくなるもんだと僕は知った。

「いやはや、年など関係ない。貴方を中心に動いている北の州に比べ、自州の有様はともお恥ずかしい限りだ」

「ガーデンディから多少の事は聞いていますが、まだ酷いですか？
くじ引き再開に向けて動いているそうですが？」

「その酷い時代が長かったせいか、今一つ踏ん切りがつかないというか。逆らうと後が怖いというのが、すっかり根付いているというか……」

齒切れのよくない答えに、それでも僕はなるほどと頷いた。

確かに権力を握っている連中に正面切って、くじ引きに戻せ！と州長館へ直談判しに行くのはエネルギーのいる行為だろう。

「治安部隊にはどれくらいくじ引き派がいますか？」

「元は一州民ばかりですから、よっぽど美味しい思いをしている者以外は、こちら側だ。言質はなかなか取れないが」

それは非常に心強い。

つまり州民の意識の流れは、くじ引き制度復活にあるって事だ。

これなら治安部隊のほとんどは脅威と考えずに済むどころか、むしろ味方だ。

「州長に対するボイコット……なんて、どうですか？ 州長館には稼ぎを納めないんです」

「……ボイコット」

「はい。そもそも州長は僕がいい例ですけど、ただのまとめ役ですから。守ってくれないどころか、虐げて来る州長に、実りや稼ぎ

を渡す必要はナイと思えますね」

何だか呆然としているが、大丈夫だろうかと思いつつも、僕は続ける。

「まず州長や腰巾着連中は州長館に押し込んで、軟禁しちゃえばいいんです。……こう、わっしょいわっしょいの、ぽっいっと」

「……ぽい」

「ぽい、です」

お！ 北西の州の皆さんが、少しずつ愉快そうになって来たぞっ。このまま勢いでしゃべっちゃえっ！

「州長館の横には蔵があるから、飢える事はナイはずです。流行病前は権力を握っている人達も、それぞれ自炊してたでしょうから」

「ふむっ」

「ちょっと頭を冷やしてもらって、権力を握っている人達にも、くじ引き復活について前向きに考えてもらう。という感じはどうでしょうか」

おや？ 皆で視線を交わしあってるなあ。

考えてくれているのかな、前向きに……。

「とりあえず無理を押し付けて来る奴等なんか放つといて、自治体を作っちゃうんですよ。これなら正面切って対決せずに済みますし、軟禁状態を維持するくらいなら、治安部隊で態度を保留にしている人も協力してくれるんじゃないでしょうか？」

「確かに……」

ちよ〜つと無責任なアイデアをダダ漏れしちゃった。

最後は、ちゃんと責任を取らなきゃなあと僕は付け加えた。

「もちろんこれからも北の州は援助しますし、土地は余ってるから移住は大歓迎です」

失敗したら集団移住して来て下さい、どーんとつ。

ところが……。

「やりましょう、親方っ!」

「やるか、盛り上がってる今やるぞ!」

「わ〜〜〜!」

「北の州長に我らの意気を見せるんだ〜!」

「うお〜〜〜!」

誰はどこで、誰々はあっちにいるとか一気に情報が集められ……
そして……。

「それ、わっしょい! わっしょい!」

「わっしょい! わっしょい!」

あれ、何かあれよあれよと集団で動いていつちゃったぞ……。

まあ、いいか！

この勢いなら、北の州的には残念だけど、ボイコットは成功しそ
うだなあ。

そんな風に思っていると、横からガンディが突っついてきた。

「エイブ。お前さ、確信犯だろ？」

「はっ？ 何が??？」

「だからさ。自分がああ言えば、こう動くだろうみたいなの……」
「へっ？」

疑問符を浮かべる僕に、ガンディがため息をついた。

「……もういい。自覚なしエイブに聞いたオレが馬鹿だった」
「何だよ」

全くもって意味不明だぞっ！

「オレ達はちょっと手伝いに行ってくるわ」

「エイブはバナ達と一緒に大人しくしててくれよ」

そう言われた僕とバナは不満を大にする。

「えっっ！」

「一緒に行きたいっ！」

しかし幼馴染達は強かった。

ヘイズルとアイリンにもしっぴかり釘を刺す。

「君達は、エイブの見張り役だからね」
「着いて来たらお仕置き」

「……謹んでお留守番させて頂きます」
「睨んでくる目が素晴らしく怖いです……」。

「エイブお兄ちゃん、暇だねえ」
「ホントだねえ。何しようか？」

結局、旅先でも置いてきぼりを食らう僕って。

馬車から荷物を引っ張り出すが、旅の間中遊んでたので、ちょっと飽きが来ている物ばかり。

ちらつと後ろを向けば……。
子供達の集団がっ！

「……暇？」

ぶんぶんと首を縦に振ってきたっ！
キラーン！ 暇人お仲間、発見しましたっ！

「そつだなあ。風揚げでもしようかっ！」
「風揚げ?!」

「「これっ！」」

ヘイズルとアイリンが、旅の間に作った自慢の凧を見せびらかし

た。

「作り方は分かるかい？」

「分らない……」

「一緒に作るうっ。まず材料集めからっ！」

「わ~~~~~」

親達が北西の州の明日を勝ち取る為の活動をしている最中、僕は州の子供達と凧作り。

無事に州長達の軟禁が完了した次の日には、大凧揚げ大会が開催された。

うん！ 実に白熱した凧揚げだったと言っておこっっ！

そして北西の州のこの一件を聞いた南西の州でも、到着してみれば同じ事が起こっており。

「南西の州の心意気も見せねばと、君が来る前に頑張ったのだよ」

「いやいや、僕なんて関係ないですよ！ 皆さんのくじ引き復活

への熱意があればこそですっ！ 南西の州、万歳！！」

そんな異様な熱気を感じつつ、僕は最終目的地の島都へ向かった。

北西の州。(後書き)

ボイコット

「……という筋書きなんだが、協力してもらえないだろうか？」
「それ、どなたのアイデアで？」

「……北の州長殿だ」

「っ！ 来られたっていう話は本当でしたかっ！」

「本当ですよ」

「お久しぶりです」

「ガーンデイさん……」

「貴方が表に出て来たって事は、本当なんですな」

「エイブは実行可能なアイデアを出すし、成功確率が高い」
「今なら皆動いてくれる。話に乗ってくれないか？」

ピュウ〜イツ！ ピュウ〜イツ！ ピュウ〜イツ！
バタバタバタバタっ！

「隊長っ！ とうとうっ?!」

「おっっ！ 長い間我慢させたっ！ 動くぞっ！」

「「はいっ!」」

「今館から出ているのは？」

「何人か、自宅に帰っている者がおりますっ！」

「州長の名前で、館に呼び戻せっ！……皆さんはどうしますか？」

「数で押すぞ。呼び出しを掛けるのは少人数で。逃げないように皆で道を塞ぐ！」

「治安部隊の皆さんは、州長館の人達の武器解除を優先でお願いします」

「もちろん、言い包めて取り上げるのが一番いいよ。頑張ろっっ！」

「「はいつ…！」」

「食堂室に集めましたっ！」

「ご苦労様」

「怪我人は居ないかい？」

「皆掠り傷で済みました。ありがとうございます」

「それじゃあ、初めまして。北の州から来ましたエッドといいます。ちょっと説教したくて集まって貰いました」

「それオレの役目」

「任せたっ」

「いい加減に周りを見ろっ！ 腹を空かせてる子供がどれだけ居る

と思ってるっ！ 良く考えろっ！」

「うん。いいね。という訳で、しばらく軟禁させてもらいます。部屋が足りないと思うので、州長館に入れなかった人は、青年の家で生活して下さい」

「青年の家の子供達は？」

「はい。皆で預かります」

「たぶん、皆エイブを見に行っちゃってると思うけどね」
「だろっな」

「……何で分かるんです？」

「ちよっと前まで青年の家で暮らしてたからな」

スイーザ。

南西の州でも無事に商品取引を終え、馬車に乗り込んだ。いよいよ島都へ向かうのだと、バナが好奇心を隠し切れない様子で尋ねる。

「ダニヤル兄、島都へはどう行くの？」

「商人達を通る平野部の道があるから、そこを通る予定だ」

初めて行く島都とはいえ、道はちゃんと把握済みらしい。

「そんな道があるんだあ」

「森の道は島都に繋がってないからな。でも、森の道より馬車の乗り心地は良いと思うぞ」

「そうなの？」

「木の根がないからな」

「なるほど」

それは助かるなあ。

大分馬車の旅にも慣れてきたが、木の根があると荷台が跳ねて揺れるからなあ。

なぐんでおしゃべりしながら、のんびり僕達は馬車を進ませている。た。

ところが、もう少し進めば、南西と南の州の州境が見えてくるといふ所に来て、御者席に座っていたエツドが不審そうな声を上げる。

「おや？ スイーザだ」

「スイーザって、誰だっけ？」

「前に山道であった、南の州の青年の家の代表者だよ」

「あ〜」

そういえば、そんな名前だったなあ。

スイーザとエッドが出会ったから、今回の島都へ乗り込む話が出て来たのだ。

エッドの声の雰囲気からして、待ち合わせをしていた訳ではなさそうだし、わざわざここまで出迎えに来てくれたのだろうか？

それとも何かあったかな？

そう僕がちらちら考えていると、少しずつスピードを落とした馬車は止まった。

「どうしたんだ、スイーザ」

「すみません。州境で北の州長捕縛命令が出てまして、この道を逆戻りして、裏道を通って島都へ入ってもらいたいです。俺が案内します」

問題発生らしい。

今、な〜んか物騒な単語が聞こえたな〜。
気のせいかな〜。

「そうなのか、じゃあ頼む」

「まあ、乗って乗って」

「お邪魔しますっ」

伝えられた言葉の内容に僕が衝撃を受けている間に、勧められたスイーザが馬車に乗り込んできた。

僕は初顔合わせになるし、まずは自己紹介だよなっ。

「はじめまして、一応北の州長のエイブです」

「……一応？」

「こら、エイブ。一応って何だ、スイーザが困ってるだろ！」

「そーだそーだ。ただでさえ、貫録ないのになっ」

「うう……」

北西と南西であつたくじ引き復活の代表者さん達に比べたら、若さで僕は取っ付きやすいと思う。

けど、州長なんて肩書持つてるし、青年の家代表って事は僕より年下だろうし、親しみやすくしようと、ちょっとだけ砕けた物言いをしただけなのに。

酷い。

「スイーザ、それが本物の北の州長だから」

「……それ扱いか、僕っ」

……しくしく。

やっぱ、一応を付けて正解じゃないかあ。

「はじめまして、スイーザです」

南の州では青年の家が何歳までなのかは知らないが、礼儀がしっかり身に着いてて、何だかそんなに年下という感じがしない。

「わざわざ知らせに来てくれて、ありがとう」

「いえ。こちらこそこんな事になって、申し訳ない。本当なら俺の方が北の州へ行くべきなのに、あんまり島都を留守には出来なくて……」

「スイーザは言葉を濁す。」

「そりゃあ代表だし、子供達を置いて遠出は難しいよなあ」

「……それだけじゃなくて」

あれ？ ちょっと言い辛そう。

何か訳ありっぽいけど、その内話してくれるだろう。

「それで、その〜？ 早速だけど、捕縛命令っていうのは何で？」

「北西と南西の州の権力者達が、北の州長が行った途端に軟禁状態になった。しかも北の州長はそのまま島都へ向かってるっていう情報が、こちらに伝わって来たので」

「何なんだ、その情報！ 端折り過ぎだろ！！」

僕は北西の州では子供達と凧揚げしてたし、南西の州では着いた時には、既に事は終わってたんだ！！

断固、訂正したい！！

憤慨する僕に、スイーザは更に続けた。

「それで同じ事になったら困るんで、北の州長を島都に入れるな！と……」

「僕が行こうが行くまいが関係ないのに、そういう流れなだけなの……っ」

しかしそれを聞いた幼馴染達は、僕とは違い、ウケて大笑いだ。

「情報なんだ、噂じゃなくてっ」

「危険人物認定おめっとさん、エイブ！」

「エイブお兄ちゃん、お尋ね者なのっ？ 何か、カツコイイっ！」

「……こらこら、バナっ」

目を輝かせるところじゃないから、ここはっ。

そんな僕達に目を白黒させながらも、スイーザは更に迎えに来た経緯を話してくる。

「青年の家の先輩達が何人も治安部隊に回されて、その関係で今回の命令もすぐに教えてもらえたので、捕縛される前にと……」

「僕は一般人だあっ！」

僕ほど島民Aと呼ばれるに相応しい、どこにでもいるありふれた一般人はいないっていうのに……っ！

「まあまあ」

「元々ヤバい橋を渡ってたんだ」

「こうなるかも知れないと思ってたから、エイブは島都には手を出さなかったんだろ？」

確かにその通りですが、いつもの事ながら僕、見抜かれ過ぎ……。もう疲れました……。

「はあ〜」

ぐったりと、馬車の幌を見上げてしまった。

「お菓子いる？」

そんな僕を慰めようと、バナが差し出して来た。

「……ありがとう」

僕が受け取るその横で、スイーザもヘイズルからお菓子を受け取りほおぼっている。

「おいしいねえ」

「うん。おいしいね」

にこにこ言ってくるバナにつられて、本当に気分が浮上する僕。

「……単純」

「いいだろっ。僕らしくてっ」

「まあな」

そんな僕達を見ていたスイーザが問いかけて来た。

「ちょっと聞いてもいいですか？」

「いいけど、年も近いし敬語止めてね」

「はい」

お？ ちょっと顔つき変わった？ ビシッと引き締まっている。

「北の州ですでにくじ引き制度が復活してるって本当なのかつ？」

「本当だな」

「青年の家も流行病蔓延前の状態に戻ってるってというのは？」

「うん。それも本当だ」

ちよつとびつくりして答えられなかった僕に代わり、ダニヤルが答えている。

「くじ引きは州民合意で復活させた。青年の家にまだ孤児達は残ってるけど、保護者がいる子供達も通って来たり、集団生活してる」

「今の島都は、青年の家は北の州と同じだ。でもくじ引きの復活がまだなんだっ！」

「お……っ」

一番に尋ねられたのが、闇市場とか商品取引の話じゃない！

それどころか今僕が目指す事を、猛烈に目を輝かせ、勢い込んで語ってくるっ！

「俺は一刻も早く、島都がくじ引きの行われる状態になればいいと願ってるんだっ」

「うんっ！ その為の協力は惜しまないよっ」

目指す所が同じ目線の仲間が島都に居たなんてっ！

僕はスイーザをしつかりと見つめた。

スイーザも気づいたらしく頷き返してきた。

「そして、全島くじ引き再開っ！！」

スイーザと僕は改めて、ガシツと握手を交わした。

いや〜スイーザとは気が合いそうだ。

まさに意気投合っ！

全島くじ引き復活の夢を語り合いつつ、馬車を島都へと進めた。

スイーザ。(後書き)

州境

ヒヒーン！ブルブルブル。

南西の州都との州境に、南の州の治安維持隊の1隊で辿り着いた。

ちゃんとスイーザに先回りで知らせたし、バレないほどゆっくり目で馬を走らせてきた。

「どうだ？」

「誰も居ない」

「検問所が撤去されてる」

「見事に人が居ないな。この前と大違いだ」

「南西の州の治安部隊維持隊がもう来ないなら、誰か近づけばすぐに分かるね」

「うーん……」

い。
恩ある島長の命令とはいえ、余り北の州長の捕縛は実行したくない。

「スイーザが合流出来ればいいな」

「大丈夫さ」

「おう」

それにしても、未だに今回の騒動が信じられない。

「北の州長が動くと思わなかった」

「スイーザと違って、指示だけ出す人かと思ってたよ」

「俺もだ。でも動かない人が動くとき怖い」

「あつという間に2州が州長交代だ」

「全島に広がるね」

「そうだな」

他州の動きは少しずつ商人を通して情報を仕入れていたが、寝耳に水の出来事だ。

聞いていたのは、北の州長が北西・南西の州を経由して、南の州に来るといふ噂話だけ。

交代劇の準備など、誰も全く気付かなかった。

でも、南の州的にはいい時期なのかもしれない。

「今度の秋、正式にスイーザにくじ引き権が出来る」

「やっとかつ！」

「他州みたいに、くじなしで州長に押し上げてても良かったのにな」

「だが島長としては出来なかったんだろう」

今は全く機能していないが、我等南の州の長だけが、正当なく引き制度における島長なのだ。

「待ちに待った収穫祭だ」

「ああ。楽しみだ」

南の州に到着。

馬車の中で、みんなを呆れさせ、寝不足に巻き込みつつ、スイーザと僕はとにかく語り合った。

過去に遡って、流行病の真っ只中の時には辛かったとか、現在の青年の家の詳しい状況。

例えば、今はこんな作業をしている……とか。

もちろん商品取引の話もした。

南の州の特産品についての関係で、逃げた牛を捕まえるエピソードも面白かった。

北の州の牛は、農耕作業の補助用であって、乳製品までは取れるだけの数が居ない。

北の州の自慢もすっかり返しておいた。

とはいえ僕は実働部隊じゃなかったから、スイーザみたく僕自身の武勇伝は1個もないんだけど……。

他州との連絡に使っていた伝書鳥が怪我をして、島都に迷い込んだ事もあったらしい。

「もしかしてその子……」

「両方向伝書鳥になるかも……」

「両方向伝書？」

「うん。伝書を持たせて放つたら、返書を持って帰ってくる子が何羽か居るの」

「バナとの実験でも、動いている“輝ける白”に戻る子が出て来て
て」

「ちょっとしたブームになってるんだよねっ」

「「へえっ」」

僕にとつてもびっくり情報だ。

「まだ全羽の実験は済んでないの」

「今も青年の家で、皆が実験してくれてるよ」

それは帰ったら結果が楽しみだ。

南の州の伝書鳥も、緊急連絡用に預かって帰る約束をする。

「島都に着いたら、どんなお世話をしているか教えてくれる?」

「俺はあまり詳しくないから、詳しい奴を紹介するよ」

「うん、お願いっ!」

「あと、この子達をよろしくねっ!」

ヘイズルとアイリンが満面の笑みで、スイーザに北から連れて来た伝書鳥を見せている。

ずっと籠に入れっぱなしだった伝書鳥が、お役に立つのが嬉しいらしい。

スイーザと僕達は、島都に着くまでずっと話をした。

聞けば聞くほど、島長は権力を独占する訳でなく、南の州をただ守っているのを感じる。

流行病後の復興に尽力を注ぎ、州民の声に耳を傾け、何かあれば文句も付けるが、否定するばかりではなく、正しく評価もしていたらしい。

それなのになぜくじ引き復活だけは固辞するのだろうか、ますます不思議だ。

裏道からこっそり南の州へ入って……さあ！ いよいよ最終目的地の島都だっ！

乳製品を作る作業も実際見てみたかったし、スイーザの提案で僕は青年の家でお世話になる事にした。

そういえば、他州の青年の家に行くのも初めてだ。

島都の青年の家も、北の州と同様に島都館の横に建っているが、素知らぬ顔なら馬車で乗り入れても、仰々しくしなければ大丈夫だろうという事になった。

島都に入ると、どうやら顔を知られているらしいスイーザは、あちこちから「おかえりっ」と親しげに声を掛けられている。

そんな様子からも島都の人々が抑圧されている印象は全く受けない。

ところが……。

「あつ！ スイーザ兄っ！ 今、帰ってきちゃ駄目っ！」

いざ、青年の家の敷地に入った所で、僕達の馬車は引き留められた。

スイーザの顔が一気に苦くなる。

「……まさか」

「うん、そう！ 島長が来てるのっ！ 早くっ、バックバック」

御者台にいるスイーザに僕は聞く。

「どうするんだ、スイーザ？」

「とりあえず、回れ右で……っ」

「了解っ」

そう返事を返してきたスイーザは慌てて方向転換をしてくれていたが、馬車は人と違って、急に逆方向に戻れない。

「コラッ！ 待ちなさい、スイーザ!!」

その声を張り上げて来たのは、4・50代の女性だった。

島長は女性だったのか。

そういえば性別は誰にも聞いた事がなかった。

「げっ」

「逃げたら青年の家の子供達がどうなるか、分かっているんでしょ
ねっっっ」

「……くそっ」

スイーザが悪態をついた後、言って来る。

「俺だけ降りるから、乗ったまま待っていてくれ」

「大丈夫か？」

「ああ。何とかする」

どうやらスイーザは、島長に青年の家の子供達を半人質に取られて
いるらしい。

だからあまり島都を留守に出来ないと言っていたのだろう。

「どこに行つてたの、スイーザ！ こんな時に遠出だなんて心配す
るじゃないのっ」

「どこだっついていいだろっ。心配しなくても青年の家の事がある限
り、俺はちゃんと島都へ帰って来るっ。……こんな時つて、どう
したんだよ？」

何だろっ、この遣り取り……？

僕にでさえ、北の州長だからと始めは敬語を使っていたスイーザ
だったのに、島長相手、しかもかなり年上相手に随分と遠慮がな
い口調のような……？

この感じだとまるで……。

「決まってるでしょう、北の州長よ。あなたが捕まりでもしたら、母さんは困るの」

母さんっ！

聞き間違いじゃないよな？ と、僕は幼馴染とお互いに顔を合わせる。

そっか、スイーザは島長の息子かあ。

馬車の中でたまに言葉を濁してたのは、こういう事だったのか。

「母さんだけじゃない。あなたに何かあったら、島都の皆も、ひいては島全体が後々困るのよっ」

「何言ってるんだよっ！ 北の州長は問答無用で俺の事を捕まえるような人じゃない。なんで母さんはそんなに北の州を警戒するんだ」

「それは……っ。北の州が周りの州と違う動きをするからっ」

「おかしいだろっ。北の州は元に戻ろうって言うだけだ。そもそも母さんは何でそこまでくじ引き再開を反対するっ？」

「……何度も言ってるでしょう、時期じゃないって！」「
「どう考えたって、今が時期だっ！」

スイーザと島長の言い合いは平行線を辿り出した。

「……ん」

これは出て行った方が良さげかなっ？

力づくで引き留められる前に、馬車から降りちゃえっ。

「こら、エイブ！」

「何で勝手に、降りてるんだよ」

「あ、馬鹿っ」

幼馴染達は口々に言って来るが……ハイ、親子喧嘩に乱入〜っと。

「どうも、はじめまして」

「誰、見ない顔ね？」

近づいてきた僕に気が付いたスイーザも、何で出てきたっ的な表情をして、慌てて僕を後ろに隠す。

「……まさかつ、スイーザっ？」

「そのまさかの北の州長です。スイーザと意気投合して遊びに来ました。エイブと呼んで下さい」

スイーザの肩を大丈夫だと叩きながら、前に出る。

「どういっつもり？」

「島長が女性だなんて、他州の女性は押え付けられてるという状態を耳にしているので、凄く嬉しいです。だから島都はしっかりしてるんですね。雰囲気も優しいし」

「……」

うーん、島長から胡散臭そうに見られてる……っ。

この反応は本物だって、信じてもらえてないっぽい？

でもまあ、ここは続けて言い切ってしまうおう。

「せつかくお会い出来た事ですし、僕を捕まえる前にお話を伺いたいのですが、如何でしょう？」

「なら、俺も……っ」

「いや、スイーザは居ない方がいいと思う。あ、でも万が一牢屋に入れられたら、ちゃんと助けてくれっ」

とは訴えておこう、うん。

スイーザの反応で、どうやら本物の北の州長だとよつやく納得してもらえたのか、島長がお茶に誘って来た。

「そうね。お話ししましょう、差しで。お茶くらいは出すわ」

「ずっと馬車に揺られて、喉が渴いているのでぐちそうになります」

「「エイブっっ！」」

独断しちゃった僕を怒ってるような、心配してるような、北の州の面々の声が追いかけてくる。

島長館に向かう島長の後を付いて行こうとしていた僕は、そういう皆は安全な所に居てもらった方がよいなどと、後ろを振り向く。

「あ、そうだ。商談は任せるっ。乳製品のおすすめ料理もしっかり習っといてっっ」

「「エイブっっ!」「」

「ここは無視っ!」

ちゃんと話し合いをしないと、絶対禍根を残す事になる。

そう感じた僕は皆に言い置き、今度こそ島長の後を付いていった。

南の州に到着。(後書き)

北西の州

「お父さん〜！ お母さん〜！」

駆け寄ってきた我が子の姿を見て、妻と2人安堵する。

「無事か〜！」

「良かったあ！」

そんな親の気も知らず、子供はじゃーんと懐かしい物を見せてきた。

「見て見て〜！ コレ作ったんだよ〜！ 明日風揚げするから見てね〜！」

しかし、頷けるはずもない。

「……すまん。出れんのだ」

「ごめんねっ！ ごめんねっ！」

あれよあれよと、州民達に軟禁されている身なのだ。

ところが子供は問題ないっと笑う。

「大丈夫っ！ すぐ横で上げるからっ！ 一緒に揚げようね〜っ！」

「……何だって？」

その言葉に耳を疑い尋ね返すと、子供は再び言った。

「ここで揚げるのっ!」

「……一緒に揚げような」

「……(泣)」

「うんっ! じゃあ、また明日ねっ!」

子供は実に楽しそうだ。

辛い目には合っていないらしい。

「無事で良かったな」

「……はい」

「前州長殿。お会いしたいと言っている方が居られるのですが
誰であろうと会う気はないっ!」

「でもお会いした方が良いですよ。北の州長殿ですから」

「……何だっ?」

許可などしていないのに、見知らぬ若造が部屋に入ってくる。
何という事だ、こんな若造に州の民は踊らされたのかっ。

「こんにちは」

「……何故ここに居るっ!」

しかも、呑気に挨拶までしくさった。

「旅の途中でして。お騒がせしてすみません」

「お前さえ居なければ、こんな目には合わなかったのに」

「いや……。たぶん生きてないですよ。あの子もね」

「何故あの子が！」

「この州でどれだけ子供がお腹を空かせていたか、ご存知ですか？」

「……知らん」

「どの親だって、お腹を空かせて泣く我が子など見たくないんですよ」

「」「」

「脅しか、これは？」

「転び様によつては、軟禁どころか、これまでの恨みを命で払わされてきたかも知れないのだぞ、という。」

「もちろん、その時は子供諸共だつたはずだ。」

「その事に始めて気が付いて、妻と青ざめる。」

「ちようどいい事に、今のお住まいは青年の家です。ちよつと昔を思い出してみるのはどうですか？ 貴方達は輝かしい時代をお過ごしのはずだ。実に羨ましいですよ」

「青年の家……」

「……北の州長殿、貴方は今お幾つ？」

「24になりました。僕は懂れていた青年の家で、過ごした事がないんですよ」

「……そうなの？」

「ええ。誠に貴方達が羨ましい……。じゃあ僕はこれで」
「……………」

そうか……。

羨ましく思えるものなのか……。
再び、妻と二人で言葉を失った。

「そうそう。ここを出るのは簡単です。くじ引き制度に戻す事を納得してくれる事」

「くじ引きだつて?!」

「ええ。平和だったクロワサント島に戻すんです。自ら仕事をし
て下さるなら、みんな大歓迎だと思いますよ」

それだけで軟禁状態から解放される。
とはいえ、これまでのように強い立場ではいられなくなるに違
なかつた。

しかし……。いや……。だが……。

色々な思考が脳裏を過り、結局馬鹿の一つ覚えの様に同じ言葉を
繰り返す。

「くじ引き……………」

「良くお考え下さい」

そして、若造……北の州長は去って行った。

明日の風揚げでも、子供は笑っているだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494x/>

白く輝く帆の下で ー北の州長の奮闘記ー

2011年12月20日14時46分発行